ダークチェイサー・ゼトラマックスの秘密

桜井　麻由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダークチェイサー・ゼトラマックスの秘密

【Ｎコード】
Ｎ１８４３Ｉ

【作者名】
桜井　麻由

【あらすじ】
「社会の巨悪に宣戦布告、闇にうごめく悪を斬る！」
ごくごく普通の大学生活を送っていた少女・小夜子は、ある事件に巻き込まれたのを機に父と伯父、そして二人の友人の新聞記者・哲夫とともに法で裁くのが大変な巨悪に戦いを挑んでいく。

謎の黒騎士

「よっ！誠、今日は何もない様だな」
「兄さんこそ原稿間に合ったのかよ」
「ああ、実は俺、東西新聞が出している雑誌でしばらくルポルタージュを書くことになったんだ。テーマは少年犯罪のこと」
「兄さんが少年犯罪のことをテーマに書くなんて珍しいじゃないか。どうしたんだよ」
「お前が最近子供たちの犯罪にすごく心を痛めているから、少しは俺も子供たちの置かれている立場を、もっと社会に訴えようと思ってね」
　夕闇が迫る四月のある日、二人の男が白金台駅の近くを歩いている。それぞれ年齢は五十代前半で、一人は真っ白なコットンのシャツにブルーのチノパンを合わせており、ブルーのジャケットを上から羽織っている。もう一人の男は、黒っぽいグレーのスーツにクリーム色のワイシャツと紺のネクタイを合わせている。
　この二人の名前は黒田一郎と黒田誠。一郎の方が誠より二歳年上だ。一郎の仕事はフリーのジャーナリストで、取材の為に家にいないことが多い。しかし、五年前一郎が書いた記事がきっかけで、ある大物政治家の悪事が暴かれたことがありマスコミの間では一目おかれているのだ。誠は警視庁広域捜査課の課長で位は警部だが、自らも事件現場に赴き陣頭指揮をとる事が多い。二人とも家は離れているものの白金台界隈に住んでいる。
　その時後ろから、
「お父さん、おじさん、ただいま！」
　と真っ赤なスカーフがアクセントになっている紺に白いラインのセーラー服姿の少女が、誠の背中をぽんぽんとたたいてきた。
「おっ、かおりじゃないか。おかえり」
　誠は優しく言った。

少女は誠の娘の黒田かおりで、城北学園大学付属高校の三年生だ。今どきの高校生らしく少し赤みがかったオレンジ色の口紅をつけ、髪をポニーテールにしている。
「そういえば小夜ちゃんはどうした？」
「そうね、もうそろそろ帰ってくる頃なのに」
一郎とかおりが駅の方を見やると、
「バンドの練習で少し遅くなるって。あ、小夜子が帰ってきたら外で食事しようか」
と誠が答えた。
「そうだね。どうかお父さんに急な呼び出しが入りませんように」
かおりはそう言ってお祈りのしぐさをして見せた。
「まったくかおりは大げさなんだから」
「なに言っているのよ！お父さんに何かあったら困るのは私たちなんだからね」
デコピンでつっこむ誠にかおりはローファーで足を踏みつける。
「痛い痛い、やめろってもう」
誠は苦笑いしながら逃げ回っていた。

その頃、城北学園大学の近くの貸しスタジオでは、かおりの姉の黒田小夜子が、仲間と自分たちのバンド「フラッシュ」の練習に打ち込んでいた。

希望がなかなか見つからない荒んだ大都会
何を信じればいいのかわからないけれど
それでも僕らは歩き続ける　今この時を

小夜子の力強いボーカルが響く中、エレキギターとキーボードが優しくハーモニーを奏で、ドラムが命の音の如くリズムを刻む。小夜子は城北学園大学社会学部の二年生で、ミディアムボブをさりげなくカラーリングし、カルバンクラインの白いTシャツにデニムシ

ャツとブーツカットのジーンズを合わせている。
やがてドラムの音が止まり、
「そろそろ上がりにしよう」
とドラムパートの男の声が響く。
「お疲れ」
小夜子はボルヴィックを一口飲みながらバッグを取りにいく。ちょうどその時小夜子の携帯電話の着うたが鳴った。
「もしもし」小夜子はバッグを肩にかけながら電話に出る。
「あ、お姉ちゃん。練習終わったの？」
かおりの声が聞こえてきた。
「今終わったわ。どうしたの？」
「お父さんが外で食事したいって。急いで帰ってきて」
「じゃあお父さんと一緒にアミューズの前で待ってて。七時には何とか行けると思うから」
「オッケー、じゃ七時にね」
小夜子はかおりが電話を切ったのを確認して自分の携帯電話の電源を切ると、愛用している白いバンディットに乗り込み、一度家に戻った。そして小さな白い革のポシェットに荷物を入れ替えると、アミューズショッピングセンターに向かった。

時を同じくして、大手町にある東西新聞社の社会部では、一人の新聞記者が最近御茶ノ水の東光大学病院で起きているある事件についての記事を書いていた。がっちりとした体格を包むベージュのジャケットが若々しいムードを漂わせ、きりっとしたりりしい目元が男らしさを際立たせている。彼の名は黒木哲夫といい、元は将来を嘱望された警察官であったが、ある事件がきっかけで辞職し、新聞記者になったという異色の経歴の持ち主である。
「ややこしいことになってきたな。この事件にはきっと何か大きな裏がありそうだ。東光大学病院……あれほど立派な設備を持っているところで、どうしてこんな事件が起こるんだろう。きっと何かあ

るぞ」
パソコンに向かって記事を編集しながら、哲夫はつぶやいていた。
「哲夫」その時哲夫の上司で社会部長の木下俊一が声をかけてきた。
「東光大学病院の件だが、また一人患者が亡くなったらしい」
「なんだって！」
「どうやらお前が前からにらんでいた通り、この事件にはとんでもない裏がありそうだ。急いで病院に向かってくれ。それから黒田にもこの件については取材させるから」
俊一が言った。俊一と哲夫は大学時代のサークル仲間であるため、気軽にお互いを名前で呼んでいる。
「俊一、実は俺も同じこと考えていたよ」
哲夫が言った。
「場合によってはお前の相棒にもこっちから何か頼むかもな。そういえばフィリピンの現地ルポはまとまったか？」
俊一が聞く。
「ああ、もう少しのところまできたぜ。竜治にも助けてもらったからね。じゃあ行ってくるよ」
哲夫はそう言って社会部の部屋を飛び出すと、シルバーのセフィーロに乗り込み、東光大学病院に向かった。

夜七時過ぎ、誠と一郎、かおりは、小夜子と合流していた。辺りはすっかり暗くなり、白金台駅前は家路を急ぐ人々でごった返している。
「遅くなってごめんね。荷物の整理に時間がかかっちゃった」
小夜子が白いスニーカーの紐を直す。
「お腹すいたよぉ。何食べる？」
かおりは待ちくたびれたのか、ベンチにしゃがみこんでしまった。その様子はいかにも退屈そうである。
「チャイナルージュに行くか？」誠が聞く。「今から買い物して帰ってからご飯作りとなると遅くなるだろうから」

「いいよ」小夜子が指でオーケーサインを作った。かおりと一郎もこっくりとうなずき歩き出そうとした。とその時一郎の携帯電話が鳴った。
「おっとっと」一郎はあわててジャケットから携帯電話を取り出す。
「もしもし」
「一郎か、俺だ。黒木だ」
哲夫の落ち着きのある低く太い声が返ってきた。
「哲ちゃんか、どうしたんだ」
「取材で今東光大学病院にいる。例の事件でまた患者が死んだらしいんだ」
「なんだって！」
「俺の職場の俊一から言われて今取材しているけど、もし忙しくなければこっちの方も協力してくれないか。二本立てになってしまって、申し訳ないが」
「その事件のことは俺も何となく気になっていたんだ。もちろん手伝うよ」
哲夫の申し訳なさそうな口ぶりに、一郎は気にするそぶりを見せずに答えた。
「十時までには家に帰れると思うから、その時までにファックスを入れてくれないか」
「了解、じゃあ後でな」
哲夫が電話を切った。
その様子をうかがっていた誠が、
「どうした、兄さん」
と聞いた。一郎は、
「哲ちゃんからの電話だ。……誠、東光大学病院での一連の事件では何か動きがあるのか」
と聞き返した。
「ああ、新薬の副作用か何かで、何人か患者が死亡してしまった話のことか。また何かあったんだな」

「また一人、患者が亡くなった」
「なにっ！」
「それで、哲ちゃんと共同で仕事をすることになったんだ。詳しいことはこれからだが」
「ということは、哲ちゃんは今現場の方か」
「ああ」
その時、「お父さん、おじさん、早く行こうってば」かおりがふてくされるように誠と一郎のいる辺りをうろつく。誠は、
「ごめんごめん」
と言ってアミューズに入ると、エレベータ乗り場を探し、ボタンを押した。
アミューズは地下一階地上六階建てのショッピングセンターで、小夜子たちが行くチャイナルージュは六階にある。四川料理が特に評判がいいが、中華ならなんでもござれのお店で、比較的リーズナブルなことから夜はいつもにぎわっている。店内に入ると、小夜子たちは思い思いに好きなものを注文した。
「こうやって皆そろって外で食事するのも久しぶりだな」
誠がしみじみと言う。
「お父さんが忙しくて三人そろって晩ご飯も久しぶりだもんね。今日はお父さんに思い切り御馳走して貰おうっと」
小夜子がちゃめっけたっぷりに言った。小夜子とかおりは五年前に母親を亡くしており、普段は二人で協力して炊事をしている。だがついつい簡単なメニューで済ませてしまいがちになるため、父である誠が忙しくない時には研究がてら外で食事をすることも多く、小夜子はほっとできるためひそかに楽しみにしているのだ。
「そうそう、こういう時じゃないとおいしいご飯は食べられないからねぇ」
かおりが茶化すように言った。
「こら、お姉ちゃんも頑張って作っているのに失礼なんだから」小夜子が軽くかおりのローファーを踏みつける。「スクランブルエッ

グ作った時に牛乳入れ過ぎて、ぐちゃぐちゃにしたのはだぁれ？」
「しまった。それを言われると弱いや」
かおりが舌をぺろりと出した。その時、
「お待たせしました」
とウェイターが手慣れた様子で料理を運んできた。
「うわ、豪華だな」
一郎は目を丸くした。一郎はテレビ局記者時代にあまりに多忙だったため未だに独身であり、料理は得意だが手の込んだ本格的なものを作るのは少し苦手なのだ。
「ああ、やっぱりここのはおいしいわ」
チャーシュー麺が大好きな小夜子が、麺を一口食べて言った。小夜子はチャイナルージュに入るとよくチャーシュー麺を注文するが、チャーシューがおいしく、特にお気に入りなのだ。
「小夜ちゃん、バンドの方はどうだい？」
チンジャオロース定食を頼んでいた一郎が聞くと、
「十月の学園祭に向けてかなり忙しいわ。スタミナ付けておかないと勉強やバイトとの両立も大変よ」と小夜子が言った。「ゼミの宿題もかなりレベルが高いし、レポート作るのも大変なんだから」
「お姉ちゃんがバンドのことですっかり入れ込んじゃっているから、最近私はお父さんが忙しくない時以外は学校終わった後も一人なんだよね。さびしいったらありゃしない」
エビチャーハンを頼んでいたかおりが割り込む。
「そういうかおりもダンスのレッスンは厳しいんじゃない？」
「うん、かなり高度な振り付けも出てくるようになった。先生は優しいけどレッスン中はすごく厳しい。レッスンの後のスムージーはとびきりおいしいけどね」
「二人とも充実しているようだな」一郎が優しく笑う。「夢中になれることがあるのはいいことだ」
「でも最近中高生の犯罪が増えているのが気になるんだよ。近所の子供たちに声をかけても話しかけてくれないし、学校も荒れるばか

りで活気がないとも聞くから」誠が心配そうに言った。「俺が駆け出しだったころ、不良と呼ばれる子供たちは結構いたけど、殺人事件を起こすような子はいなかった。立ち直って元気にしている奴もたくさん知っているから…。どうしてこんなにおかしくなっちゃったのかな？」

「夢のない世の中だからってこともあるぜ。なんでもお金お金ばっかりだからさ。それに悪い大人が世の中にうようよしているから、目標にしたい大人が見つからないんだよ」

一郎が答える。

「せめて学校に行くのが楽しいという子供たちが増えれば、また違うんだろうな」

誠はそう言うと卵スープを一口すすった。

「哲ちゃんもそれは言っているね。あいつは武道も得意だから、ナイフを持つ子供たちが問題になった時もすごく心配していたし」

一郎も同感と言いたげな言葉を返した。

「黒木さんも大活躍ね。国内だけじゃなく海外も飛び回っているんだから」

小夜子が言った。小夜子は父の友人でもある哲夫をとても尊敬しており、かおり共々本当の娘のように可愛がられているのだ。

「ベトナムのレポートもすごく考えさせられたわ。ベトナム戦争って私たちが生まれる前の出来事だけど、アメリカ軍が散布した枯葉剤の影響で、いまだに奇形のハンデのある赤ちゃんが生まれる話には胸が痛くなったわ」

「哲ちゃんは、海外取材の時には現地で今何が起きていて何が問題になっているかを徹底的に取材するからね。現地の人とも積極的にコミュニケーションを取るし。俺も見習わないと」

一郎が言った。

東光大学病院。ここは高度先進医療やスポーツ医学に力を入れていることで全国的に有名な総合病院である。お茶の水駅からも近く、

特に心臓血管外科のスタッフの充実ぶりが目立っている。その内科病棟では、肝細胞がんの患者への対応に医師と看護師が追われていた。一人の内科医が看護師とともに病室に向かい、輸液とともに抗がん剤を患者に投与していく。

一方ナースステーションでは、患者からのナースコールが鳴り、看護士があわてて別の病室に飛び込む。そこでは抗がん剤の副作用に苦しむ患者がうめき声をあげている。

「ゼトラマックスは正しく他と併用されているのか」

「はい、ですが患者さんには強すぎるようで」

「おかしいな。よくある副作用はともかく、普通の抗がん剤ではありえない副作用があるとでも言うのか。いったいどうなっているんだ」

あわてて駆けつけた医師が看護師に事情を聴いている。

東光大学病院ではここ一カ月の間抗がん剤がらみの死亡事故が相次ぎ、緊急対策チームを立ち上げたばかりである。だが中々原因がつかめず、現場の対応は後手になっていた。

「薬剤部の調査データはまだなのか」

「はい、現在原因は調査中です」

「まったく…以前からあの薬の投与には相当なリスクがあると聞いていたが、ここにきて急に何件も出てくるなんておかしいよ。副作用のチェックは相当厳しくしているのに」

医師と看護師は静かに病室を出て行った。

一時間後、食事を終えた小夜子たちは一郎が運転するネイビーのスカイラインに乗り、家路につく途中だった。小夜子たちの家は白金台駅から南へ約二キロ下ったところにある。車なら十分ほどの距離だ。ところが夜八時になり交通量もかなり減ってくる中、一郎が運転しているスカイラインにピタリと張り付く車に誠が気づいた。

「兄さん、後ろの車気をつけて」

「わかった」

誠の言葉にうなずく一郎。その目がとらえたバックミラーには黒塗りの車が映っていた。交差点が近づき、一郎は信号を右折する。ところが、スカイラインをはさみうちにするように前後から黒塗りの車が体当たりしてきた。回避しようとハンドルを切った一郎だが間に合わず、スカイラインはヘッドライトのあたりをめちゃめちゃにされ、ボンネットのエンジンルームまで破壊されてしまった。

かおりが泣き叫ぶ。その時、

「このままじゃみんな死ぬぞ、脱出だ！」

と誠が叫んで助手席のドアを開けた。一郎とかおり、小夜子もドアを開けて外に出る。そして四人が駆け出した瞬間、大爆発とともにスカイラインは炎に包まれた。そして黒いスーツの男たちが四人に襲いかかってきた。

「小夜子、かおり、早く逃げろ」

誠が男の一人を投げ飛ばしながら言った。

小夜子はかおりと家を目指して走り出す。小夜子たちの家は、交差点を右折して六百メートルほど先だ。しかしかおりが道路のでこぼこに足を取られ転んだところに、男たちの影が迫っていた。小夜子はかおりのそばに戻ると合気道の小手返しを男の一人に浴びせ、もう一人を四方投げで投げ飛ばした。かおりも男の股間に蹴りを入れる。そこへ誠と一郎が追い付いてきた。が、別の車から男たちのリーダーらしい者が現れた。

「お前に動かれちゃ困るんだ。黒田一郎！」

その男は低くはっきりとした口調で言った。

「お前さんが探りを入れている東光大学病院の事件には、我々の秘密が絡んでいるのでね、マスコミに出されたらまずいし、秘密を知られてもまずいのですよ」

「なにっ！」

一郎と誠はさっと身構えた。

「どこで俺の名を知ったか知らないが、例え貴方達が俺を殺しても何の得にもならないぞ」

一郎は毅然として言った。その言葉には、一人のジャーナリストとしての誇りと、自分なりに悪と戦う思いがにじみ出ていた。「それに私の弟は刑事だ。ここで事を起こしたら、皆さんは即刻現行犯逮捕ですよ」

「何だと！証拠を見せろ」

別の男が怒鳴ると、

「警視庁広域捜査課警部、黒田だ。すでに皆さんの一部は器物損壊の現行犯ですよ！」

と誠が警察手帳を見せた。その目はすっかり刑事の真剣な目に変わっていた。

「我々の邪魔をするのならこうしてやる。女だろうとかまわん、やっちまえ！」

リーダーの男が言った次の瞬間、男たちが一斉に銃を発射してきた。必死になって誠と一郎が、小夜子とかおりをかばいながらそれをよけるが、一郎をかばった誠が腹部を撃たれてしまった。

「誠！」

とっさに傷ついた誠をガードしようと一郎がすかさず飛び込むが、肩口と腹部を撃たれてしまった。

「お父さん！」

「おじさん！」

小夜子とかおりは、父と伯父を助けようと、男たちに応戦しながら駆け寄ろうとした。が、その時かおりががっしりした体格の男に投げ飛ばされてしまい、気を失ってしまった。

「かおり！」

小夜子はかおりを助けようとしたが、その背後から右肩目がけて2発撃たれてしまい、その後腹部を撃たれてしまった。

「うっ！」

小夜子は膝をついたがすぐに立ち上がって、男たちに膝蹴りを入れたが、苦しそうに倒れ込んだ。

「小夜子！」

誠が体を起こそうとしながら、苦しそうに言った。
「かおり…」
小夜子はかすれた声で言って、うつ伏してしまった。しかし、意識が薄らいでいく中、小夜子は地面を這ってかおりの方へ向かおうとした。
その様子を見ていた男たちは、かおりを自分たちの車に連れ込んだ後、
「お前の娘はもらっていくぜ、刑事さん」
「まあ三人ともこのままだとお陀仏だろうけどな」
と言った後、
「ハハハハ…」
と不気味に笑った。
「ちくしょう！」
一郎が苦しそうに言いながら誠を気遣っていた。そして急いで自分の携帯電話を取り出し、一一九番しようとボタンをプッシュした。スーツが血で染まっていたが、一郎は必死に力を振り絞っていた、何とか皆を助けなくては。生きて帰って、あの男たちのしていることが何なのかを突き止めなければ。一郎はその思いから、残った力を振り絞って立ち上がった。
その時だった。
「うあっ！」
闇夜を切り裂く稲妻の如く、黒いブーメランが宙を待った。その瞬間男たちの一人が、肩口をブーメランで斬りつけられて倒れ込んだ。
そして、低く太い男の声が響いた。
「そこまでだ、お前たち！」
次の瞬間、全身を黒豹の姿を模したメタルアーマーに包んだ戦士らしき者が、闇夜に舞うつむじ風のように物陰から姿を見せざま、男たちに飛びかかった。巴投げで男の一人を投げ飛ばし、黒のアーマーの戦士は再びブーメランを右手に構える。

「何者だ！」
リーダーの男が怒鳴る。
「俺か…『黒の疾風・ダークパンサー』とだけ言っておこうか」
「邪魔をする気か！」
「お前たちが何を企んでいるかは知らないが、これ以上勝手なことはさせないぞ！」
黒のアーマーの男＝ダークパンサーは言った。仮面の部分が静かに光を反射する。それは男たちを威嚇するのに十分だった。
「やっちまえ！」
リーダー格の男が怒鳴り、配下の男たちが飛びかかった。
ダークパンサーはさっと身を翻すと、
「おとなしく帰るんだな！」
と光線銃・ワルサースナイパーを男たちに向けて次々と発射した。
「うあぁぁぁっ！」
男たちが光弾のダメージで次々と倒れていった。その体は電気ショックと超音波のダメージで身動きがとれなくなっている。
その後、ダークパンサーはそばに倒れている小夜子を見つけて脈を診た後、誠と一郎の元に走った。そして少し低めの声で、
「しっかりしろ」
と一郎に声をかけた。一郎は、
「今、救急車を呼んだ。後を…」
と言って意識を失った。
「わかった」
ダークパンサーはしっかりうなずいた。そして救急車が三台同時に来たところで、小夜子、誠、一郎を救急隊に預け、どこへともなく去っていった。

巨悪

それから一夜が明け、一郎と誠が入院している病室を哲夫が訪ねてきた。
「二人とも危ないところだったな、でも助かってよかった」
哲夫がほっとしたように言った。
「哲ちゃん、どうしてこんなところにいるんだ？」
誠が怪訝そうに言った。一郎も、
「俺たちがあの連中に襲われて意識をなくす前に聞いた声も、なんか哲ちゃんっぽかったのになぁ」
と不思議そうに言った。余りに哲夫とダークパンサーの声が似ていた為に、誠も一郎も不思議な感じがしたのである。
「いいんだよ、そんなことは。そうだ、一郎これを渡しておくよ」
哲夫はそう言って、黒のアタッシュケースから青い色の封筒を取り出し、一郎に渡すと出口へ歩き出した。
「哲ちゃん、どこに行くんだ」
誠が聞くと、哲夫は、
「小夜ちゃんの様子を見てくる」
と言って誠たちのいる病室を出て行った。
小夜子は辛うじて一命をとりとめたものの、大事をとって病棟の個室に入れられていた。哲夫が部屋に入ると、小夜子は包帯だらけの痛々しい姿でベッドに横たわっていた。
「小夜ちゃん、大丈夫か」
哲夫は優しく声をかけた。しかしその心の奥には小夜子をこんな目に遭わせた者たちへの怒りが静かに渦巻いていた。こんなかわいい女の子にひどいケガを負わせた奴の正体を絶対暴いてやると。
「うっ、ううっ、痛い！」
やがて小夜子は傷の痛みで目を覚ました。
「よかった。君のケガが一番ひどいと聞いて心配して来たんだよ」

哲夫はほっとした様に言った。
「黒木さん、どうしてここへ？」
「君のお父さんとおじさんに渡したい物があってね」
哲夫はそう言って小夜子のベッドの元へ歩み寄り、彼女の手をしっかりと握ってやった。
「黒木さん…」
小夜子が悲しそうにつぶやく。
「君たち家族を殺そうとし、君にそれだけのけがを負わせたのは誰なんだい？」
「背後から狙われたからわからない。おじさんを狙っていたみたいだけど、なぜなのかわからない。おじさんに動いてもらっちゃ困るって言っていたけど」
小夜子が言った。その声と体は昨夜の恐怖を思い出したせいか、かすかに震えていた。
「そうか。いよいよ見えない悪が動き出したと言うわけか」
「えっ、見えない悪が動き出したですって？」
「かおりちゃんからその後連絡はあるかい？」
「ないわ、全くない」
「何かとんでもない悪の陰謀に君たちは巻き込まれてしまったようだな」
「黒木さん、どういうこと？それにダークパンサーは何者なの？」
小夜子は必死に問い詰めた。小夜子もまた、ダークパンサーの声を薄らいでゆく意識の中で聞いていたのだ。
「教えて！私たちを助けてくれたダークパンサーが何者なのか」
哲夫は首を横に振った後こう言った。
「今は明かすことは出来ない。でも彼は巨悪と戦い続けているんだ。闇の中でうごめく悪と戦っているんだ」
「わかったわ。でも、とんでもない悪の陰謀って何なの？」
「落ち着け、傷に響くぞ」
哲夫は優しく諭し、小夜子に布団をかけてやった。そして、少し

息を整えてから、静かに言った。
「辛い事を聞かせてしまうが、実はかおりちゃんは、君たちを襲った連中に誘拐された可能性があるんだ」
「なんですって！なぜかおりがそんな目に！」
小夜子はそういうと、うつむいてそっと涙をぬぐった。かおりを助けようとして力尽き、瀕死の重傷を追っていた事を後でドクターから知らされながら、小夜子はかおりのことが気になってどうしようもなかった。誘拐されているかもしれない。その現実を知った小夜子は、ベッドでじっとしていなくてはいけない今の自分がもどかしかった。
「辛いことを聞かせてしまって申し訳ない。でも同じような事件が最近連続して起きているんだ。それに巻き込まれているのは警察関係者や新聞記者、ジャーナリストがほとんどで、何人か殺された者もいるんだ」
「えっ？そんな事が」
「しかもその事件は、決まって東光大学病院での一連の事件と重なるようにして、起こっているんだ」
「じゃ、どうして私たちが皆揃って奴らに？」
「おそらくマスコミと警察にプレッシャーをかけるのが目的だと思う。奴らの実体がつかめていないから、今のところはこれだけしか言えないが、俺は一連の事件に奴らが絡んでいると思う」
「新薬の臨床試験か何かで、何人か患者が亡くなっているのは私も知っているわ。それに奴らが絡んでいる可能性があるというのね」
「ああ」
「でも、なぜそんなことを。許せない！絶対に私も真相を探ってやるわ。それにかおりを絶対助けなくちゃ。ひどいことしていたらただじゃおかないんだから」
小夜子は静かに怒りを込めて言った。なぜこんな事になったのか今はわからないけど、かおりが誘拐されたかもしれない上に、その裏に恐ろしい陰謀が隠れているのなら、真実を知りたい。小夜子は

そう思っていた。
「そんなことをしたら、君の命が危なくなる。奴らの実体がわからない中でむちゃはするな。何をしてくるかわからないんだぞ、奴らは」
「だって、そんなこと言ったって」
「奴らの陰謀はダークパンサーがつぶす。大丈夫だ」
反論しようとした小夜子に、哲夫は力強く言った。
「わかったわ」
「ごめんな。とにかく今はゆっくり体を休めることだけを考えるんだ。お父さんたちが元気になるまでのことは俺に任せろ。悪いようにはしないから」
「怖いわ、私。また何かあったら」
「大丈夫、君がちゃんと眠りにつくまで俺がいてやるから。ゆっくりお休み」
哲夫はそう言って、小夜子の右手を再び軽く両手で握ってやった。
「ありがとう」
小夜子は安心したのか、ふっと息をつくと軽く目を閉じた。
哲夫は小夜子のその様子を見て、小夜子たちを危険な目に遭わせかおりを奪った「見えない巨悪」に対し、激しい怒りを燃やしていた。
「なぜ奴らは、平和に暮らしている小夜ちゃんたちをこんな目に。何の目的でこんなことを。俺は奴らを決して許さない！」
そして哲夫は、窓の外を見つめながら、ふと腕時計型の黒光りするメカを目にやると、悲しそうにつぶやいた。
「出来ることならもうこの力は使いたくなかった。でも最近の一連の事件で奴らの陰謀のためにたくさんの人が死んでいるのを知った以上、俺が奴らと戦わないと犠牲者がますます増えるだけだ。この力を今自分の意思で使えるのは俺だけなんだから。まして小夜ちゃん、誠、一郎を助けるために、俺は自分で封印を解いてしまったんだ。俺はもう一度、闇の仕置人・ダークパンサーに戻らなければい

けなくなってしまったな」
　その時、小夜子の頭が小さくコトンと動いた。
「もう大丈夫だな」
　哲夫は、小夜子が完全に眠りに落ちたことを確かめ、もう一度、
「小夜ちゃん、いい夢を見るんだぞ」
とスヤスヤと眠っている小夜子にささやいた。そして、左腕についている黒光りするメカを見つめながら、自分自身にしっかりと誓ったのだった。
「どんなことがあっても奴らの陰謀は絶対に叩き潰す。奴らと戦えるのは俺しかいないんだから。今は」
　哲夫は小夜子の眠る病室を出て病院を出ると、自分のブラックボディのゼファーで家路に着いた。その上で夜空は哲夫の思いを映すが如く悲しくきらめいていた。

ダークパンサー、それは哲夫の今ひとつの姿である。
　二十年程前、哲夫は警視庁の特別捜査チーム・アルファスターのメンバーだった。
　アルファスターとは、凶悪化してくる犯罪やテロなどに対処するために特殊な訓練を受けた警視庁の犯罪捜査のプロフェッショナル集団である。哲夫はその行動班・チームＺＡＴＴのリーダーで、仲間の四人の刑事と犯罪捜査にあたっていた。哲夫とその四人には特殊な強化アーマー・メタルサイバースーツが渡されており、いざとなればそれを装着して捜査のスピードアップを図っていたのである。小夜子の父・誠もアルファスターのメンバーで、哲夫たちの活動を後方支援していたことがあるのだ。
　ところが、十五年前東京で起こったテロ事件の際、ＺＡＴＴのメンバー二人はテログループの凶弾に倒れ殉職してしまい、生き残ったのは哲夫と誠、そして後の小夜子の母・美咲だけになってしまった。更に哲夫は、アルファスターに技術協力をしていた黒木重工の社長でもある父・健一を、その事件のあおりで目の前で失ってしま

う。優秀な技術者だった健一は、城北学院大の海堂博士とメタルサイバースーツを共同開発していたのだが、その開発技術がテロ組織・ザインバックの標的になってしまったのである。だが、命と引き換えにメタルサイバースーツのデータを守り抜いた健一は、息子である哲夫にメタルサイバースーツの改良型であるメタルアーマー・シャドーテクターと、その設計データを死の間際に託したのである。

その後、父の死の真相を誠たちと調べた哲夫は、ザインバックの黒幕にある大物政治家がいることを突き止めるのだが、その捜査に携わっていくうちに上層部から圧力をかけられ、逮捕寸前のところで捜査を一方的に打ち切られてしまう。

哲夫はそのやり方に納得がいかず、アルファスターのチーフを通して捜査続行を願い出るが、上層部は聞き入れようとはしなかった。哲夫はそのことがきっかけで警察の捜査能力の限界を感じ取り、自分で社会の悪と戦う決意を固め、警視庁を辞めた後に東西新聞社に転職したのだが、誠や同僚の刑事たちには、警視庁を辞める際に一言も理由を話していなかったのである。

そして新聞記者の仕事を利用して、銀行の不正融資の実態を暴いたり、子供を虐待する養護施設の真実を暴いたりという形などで、社会の悪と戦ってきたのだが、その悪人どもを懲らしめる時に、父から託された黒の腕時計状のシャドーテクターのシステムメカ・シャドーアクセプターを起動し、黒豹をモチーフにしたアーマーを装着。闇の仕置人・ダークパンサーとなって、夜ごと現れては悪人どもを懲らしめていたのである。

小夜子たちを見舞った後に白金高輪にある自宅のマンションに戻った哲夫は、シャワーを浴びた後、自分のノートパソコンに向かい、いつもの通り記事をまとめていた。

その時机の上の電話が鳴った。哲夫はおもむろに受話器を取ると、

「もしもし、黒木です」

といつもの調子で呼びかけた。すると、

「黒木じゃないか。どうしたんだ。ったく、何度かけてもいないから心配したぜ！もう」
と、大学時代からの親友であるカメラマン、黒沢竜治の声が返ってきた。
「いやぁ、悪い。ちょっといろいろあってね」
哲夫はそう言って頭をかいた後に、
「実は東光大学病院の事件のことなのだが」
と続けた。
「ああ、そのことか。どうしたんだ」
「誠と一郎と小夜ちゃんのところに行ってきた。三人とも元気だったが、まだもう少し退院まで時間がかかるらしい」
「そうか、全くひどいことをしやがるぜ」
「奴らの実体がよくわからないから何とも言えないが、俺は、奴らの狙いは、東光大学病院の事件のことで警察とマスコミにプレッシャーをかけることじゃないかと思うんだ。
「ということは、誠たちや一郎が知らないところで、とんでもない巨大な悪が動いている可能性があるんだな」
「いや、奴らは一郎に動かれると困ると言っていたらしい」
「なんだって！」
「小夜ちゃんから聞いたんだ」
「そうか」
哲夫からこれまでのことを知らされ、竜治は心配そうにつぶやいた。
「黒木、ずっと事件を追っていくのか」
「もちろんさ」
「俺に何か手伝えることがあれば言ってくれよな」
「ああ」
哲夫はまかせとけという感じでうなずいた。
「じゃあな、奴らには用心したほうがいいぜ」
竜治はそう言って電話を切った。

哲夫は、受話器をゆっくり置くとふっとため息をつき、そばにあった缶コーヒーを一気に飲み干した。そして再びノートパソコンで丁寧に記事をまとめ上げていった。
「奴ら…絶対俺は許さない！誠の家族まで巻き込むなんて。絶対陰謀を暴いてやる！」
哲夫は、右腕に光るシャドーアクセプターを見つめながらつぶやいた。

それから十日が過ぎた。小夜子たちは日赤医療センターに入院していた。
「かおりを助け出す方法を考えなくちゃなぁ」
誠は、父としてかおりを助けられなかった責任を感じていた。
「でも、お前が下手に動くとまずいぜ。父親だから責任を感じるのもわかるが、奴らの実体がまだつかめていない以上、うかつに動くと奴らを刺激することになる」
一郎が落ち着いた口調で言った。と、その時、
「お父さん、おじさん、大丈夫？」
と隣の病室から小夜子が入ってきた。
「小夜子……お前こそ大丈夫なのか？」
「まだ手術の跡が少し痛いけど平気よ！そういえば、今日のニュース見た？　気になることがあったんだけど」
「気になること？」
「東光大学病院で亡くなった人たちは、皆同じ会社の薬を投与されてから十時間後に亡くなっているの。そういえば、お父さんとおじさんのところに黒木さんは来たのかしら」
「哲ちゃんならお父さんたちのところにも来たけど」
「うん、それで黒木さんが教えてくれたことがあるのだけど、一連の事件と同じ時期に重なるようにして、何人か刑事さんや新聞記者、ジャーナリストが殺されているんだって」
「なんだって！」

「奴らの狙いは俺たちだけじゃなかったというわけか…」
誠と一郎は驚いたように顔を見合わせた。
「困ったなぁ、これじゃ思うように仕事も出来ないじゃないか」
「おじさん、それなら私にまかしといて！」
「まさか小夜子、一人で事件を探るつもりなのか。まだ抜糸してなかったら何かあったら大変なことになるんだぞ」
「もう抜糸しちゃったし、明日退院だもん！」
「お前は本当にタフな娘だな。お父さんも負けそうだよ」
「そういうけど、俺たちだってあさって退院だろう？」
「それなら話は早いじゃん、三人でいろいろ調べてみようよ」
「哲ちゃんも協力してくれるって言っていたしね。…かおりから何も連絡がないのが気になるけど」
「そういえば黒木さんが、かおりは奴らに誘拐されているかもって言っていたわ」
「えっ？」
小夜子の言葉に、一郎が声を荒げた。
「それなら余計に早く何とかしなくちゃ！」

翌日小夜子は、家に一足早く戻ると哲夫の携帯電話の番号をプッシュした。
「もしもし、黒木です」
数回の呼び出し音の後、哲夫の声がすぐに入ってきた。
「黒田です。小夜子ですけど、今病院から戻りました」
小夜子が呼びかけた。
「小夜ちゃんか…。もうケガの具合は大丈夫かい？」
哲夫が小夜子の体の傷を気づかって声をかけた。
「ええ、父もおじさんも明日退院します」
「よかった。ところで、今日のニュース見たかい？」
「はい、それで気になることがあるんですけど、黒木さんの方でちょっと調べてもらえますか？」

「どういうことかな」
「例の事件ですけど、東光大学病院で亡くなった人は皆同じ会社の薬を投与されてから十時間後に亡くなっていると報道されていたんです。その薬を出している会社と薬の名前や種類を調べることは出来るかしら」
「ずいぶん細かいな。さては小夜ちゃんなりに何か感づいたのか」
「だって、ニュースだとその薬は抗がん剤と言っていたけど、普通抗がん剤でなんかそう簡単に人は死なないはずですよね。確かにあんまり大量投与すると生命に危険が及ぶ可能性があるといったって、お医者さんがうまく処方すればほとんど安全なんだから」
「なるほど、抗がん剤と言うことで出している薬の中身に裏があると見たのかな」
「ええ、なんか変な感じがするんですよ」
「よし、そういうことならまかしとけ！俺の職場でもそれを調べようとしていたところだったんだ。……ところで小夜ちゃんはどうするんだ、これから」
「かおりのことを探しに行くつもりです」
小夜子は言った。が、
「まだ下手にあちこち動き回るのはやめておくんだ」
と哲夫が言った。
「えっ？」
「小夜ちゃんが入院していた間に、俺の方でも手を尽くしていろいろ調べたが、君たちを襲った奴らの実体が未だにわからないんだ。かおりちゃんからもまだ連絡がないから、誘拐と見て間違いない」
「なんですって！」
「奴らの目的が、本当に一連の事件のことでマスコミと警察にプレッシャーをかけることだったとしたら、俺たちの行動が奴らに監視されている可能性も十分にあるぞ」
「冗談じゃないわ。かおりがわけもわからずひどい目に逢っているかもしれないのに！」

小夜子は怒りにまかせてまくしたてた。
「小夜ちゃん、落ち着くんだ。君の気持ちはよくわかる。だけど、今下手に動いたら君は殺されるかもしれないんだぞ」
「でも……」
小夜子は口ごもった。
「明日お父さんとおじさんが戻るのなら、それから動いたほうがいい。俺も出来る限り力になるから」
「わかったわ」
小夜子は少し悲しそうに言った。
「今日はゆっくり休むんだ、またね」
哲夫はそう言って電話を切った。
小夜子は受話器を置くと声を上げて泣いた。哲夫の優しさは嬉しかったのだが、かおりを誘拐された現実を知りながら、何も出来ない今の自分がたまらなく悲しかった。
しばらく思い切り泣いてから涙を拭いた小夜子は、自分の白いバンディットに乗り、亡き母・美咲との思い出の場所に向かった。

一方哲夫は、取材の為に東光大学病院の入り口にいた。もちろんニュースで報道された、薬の疑惑の真相を探るためである。と、その時、
「哲夫、大変だ！」
と俊一と竜治が駆け込んできた。
「二人ともどうしたんだ」
「何者かに病院の薬局と薬剤室がめちゃくちゃにされたらしい。俺も念のために中に入って写真をとったが、ひどい状態だった」
「ちくしょう、これじゃ薬の疑惑の解明がぜんぜん進まないぜ。ところで哲夫、さっき病院の受付に変なファックスが届いていたらしい。ちょっとこれを見てくれないか」
俊一がそう言って一枚の紙を見せた。

「警視庁関係者、新聞・テレビ・ラジオ・雑誌社等のマスコミ関係者に告ぐ。
東光大学病院で起きている事件の報道や捜査をこれ以上続けると、新たな犠牲者が出ることになるであろう」

ファックスの内容はこれだけだった。哲夫は、
「奴ら、ついに宣戦布告してきたか。ふざけやがって！」
と怒鳴った。それを聞いた俊一は、
「宣戦布告だって？」
と聞き返した。
「今は奴らの実態がよくわからないけど、実は一郎とその弟の家族が奴らに襲われたんですよ。幸い一郎とその弟は助かったんですが、彼のお嬢さんが、奴らに誘拐されてしまったんだ」
「何だって！一郎の弟と言ったら、警視庁の黒田警部のことか」
「警部にはお嬢さんが二人いるのだけど、高校二年生のかおりちゃんが奴らに誘拐されていて、お姉さんの小夜子ちゃんが重傷を追って、今日まで入院していたんだ」
「ふざけた野郎だぜ。何の目的でこんな真似を」
「こんな脅しに負けてたまるか！絶対奴らの企みは阻止してやろうぜ」
「真実を伝えるのが、俺たちの使命だからな」
「ああ、俺たちと一郎と誠だけでも真相を暴いてやろうぜ」
竜治と俊一、そして哲夫は、意を決するように取材に入っていった。三人のその目にはジャーナリストとして、この事件の真相を突き止めたい真剣な思いがあふれていた。

黒幕

小夜子は東京ドームアトラクションズの中にいた。幼い頃、誠が非番の時によく遊びに連れて行ってくれ、野外劇場・現在のスカイシアターのヒーローショーを家族で一緒に見ていたのをよく覚えている。小夜子は幼い頃よく戦隊ヒーローのヒロインのまねをして遊んでいたが、時々むちゃをしてけがをするのも日常茶飯事で、母・美咲に叱られることもあった。ジェットコースターが余りに怖く、降りた後大泣きしたこともある。

小夜子は幼い頃とはガラリと変わった乗り物を楽しみつつ、懐かしい記憶をたどっていった。幼い頃怖くて大泣きしたジェットコースターは、まだほぼ当時のまま残っている。

「もう一度皆で行きたかったな」

ふと小夜子は母のことを思い出す。小夜子とかおりの母・美咲は、誠と結婚した後警視庁に勤めながら海外援助ボランティアのスタッフをしていたが、カンボジアに地雷で大けがをした子供たちの慰問に向かう途中、その地雷の爆発に巻き込まれて五年前に亡くなってしまったのだ。

いつの間にか夕日は沈み、あたりは色とりどりのライトに包まれる。小夜子は東京ドームのほうへと足を進めた。プロ野球シーズンが始まったためか、歩いて行くうちにジャイアンツカラーのオレンジのメガホンを持った人々がちらほらと目に入ってきた。二十二番ゲートの前の噴水はライトを受けてキラキラと輝いている。

とその時、小夜子は背後から羽交い絞めにされ口を塞がれそうになった。

「今度こそ死んでもらうよ」

男の声が冷たく囁く。

小夜子はしゃがんでそれをかわすと、相手の右足を自分の右足で思い切り踏みつけた。そして、相手の隙が出来たところで相手の右

手首をつかんで締め上げると、そのまま男に四方投げを浴びせた。なおも向かってくる男に小夜子はありったけの力をこめてパンチを打ち込む。
「ぎゃあ！」
痛さの余りにナイフを落とす男。しかしこれでは終わらなかった。物陰に隠れていた男の仲間四、五人があっという間に小夜子を取り囲むようにナイフを振り回してきたのだ。
「どうしよう。私は素手で向こうはナイフ。このままじゃやられるわ」
襲ってくる男たちの攻撃をかわしながらも、小夜子の脳裏にはあの悪夢がフラッシュバックしていた。どうにか一人ずつ倒そうとするが、投げ技を連続でかけていくのが精一杯で、ナイフを相手から取り上げるところまでいかない。やがて小夜子は男たちのナイフ攻撃をかわそうとして後ろに倒れてしまった。
「しぶとい女だ」
男たちの一人が小夜子の胸めがけてナイフを振りおろそうとする。小夜子は男のすねを蹴飛ばし、反動をつけて立ち上がった。しかし男たちに再び囲まれてしまった。逃げ出そうにも思うように身動きが取れない。
だが、その時、どこからともなく黒のブーメランがあの時と同じように闇を切り裂くように宙を舞った。たちまちそのスピードで肩口を切りつけられ、倒れこむ男たち。
「あっ、あれは！」
小夜子が思わず振り向くと、そこにいたのはダークパンサーだった。
「ここは俺に任せろ。下がって」
ダークパンサーはさりげなく小夜子をガードする。小夜子はその声に聞き覚えがあった。「あの声はまさか…」
「また邪魔だてしにきたのか！」
男の一人が怒鳴る。

「女一人を大勢で痛めつけようとするなんて、悪党らしいやり口だな」
ダークパンサーが言った。「悪党の中でも最低の奴らだな。お前たちは」
「やっちまえ！」
別の男が怒鳴った。
「それなら仕方ないな」
ダークパンサーは、手にしていたブーメランの他にもう一本同じ物を取り出し、一方を投げ込み、もう一方で男たちの肩口を鮮やかに切りつけていった。
「うわーっ！」
男たちが次々と倒れこんでいく。
「大丈夫か」
ダークパンサーは小夜子の元へ駆け寄った。
「大丈夫。また助けてくれたのね」
小夜子は歩こうとしたが少し足もとがふらついていた。体力が少し落ちているのだろうか。
「病み上がりなのにムチャはいけないぞ」その時ダークパンサーが言った。「それより早くここから離れよう。俺の肩にしっかりつかまれよ」
どうして病み上がりだって知っているの？それに聞いたことがある声だわ。誰なのかしら？小夜子は疑問を感じながらもダークパンサーの方に右手を回した。するとダークパンサーは小夜子の体をゆっくり抱きかかえた。そして、
「今のうちだ」
と言って大きくジャンプしてその場を離れた。

それから十分ほどたった頃、小夜子は自分のバンディットのそばで目を覚ました。うっかりして少しうとうとしてしまったようだ。ゆっくり立ち上がると辺りをぐるりと見回す。しかしダークパンサ

ーはいなくなっていた。
「あれ？どこへ行っちゃったのかしら。あの人は…」
小夜子があたりをきょろきょろしていると、
「気がついたようだな」
と哲夫が紺のスーツに白いシャツ、ブルーのネクタイ姿で現れた。
「危ないところだった小夜ちゃん。もしもダークパンサーが来なかったらやられていたよ」
「ああびっくりした。でも黒木さん、なぜ私がここに来ているのがわかったの？ダークパンサーはどこ？」
「なあに、虫の知らせってやつだよ。ハハハッ」哲夫はいたずらっぽく笑った。「それは冗談としても心配だから迎えに来たんだよ」
「もう、黒木さんったら。私だって子供じゃないんだから」
小夜子が口をとがらせる。
「まあ、そう言うなって。俺は小夜ちゃんのことを小さい時から知っているからね。それよりご飯は食べたかい？」
「ううん、ちょうどご飯食べに行こうとしたところで襲われたから…あらいやだ、お腹が鳴っちゃった」
哲夫に聞かれ小夜子は少しうつむきながら答えた。その顔は少し赤くなっている。
「よし、今日は俺のお気に入りのイタリアンのお店があるから、そこで食べようか。バイクのキーを貸して」
「え、運転くらい平気なのに」
「今日は俺が君のバイクを運転してやるから、何も考えずに俺に甘えろ」
哲夫はそう言って、小夜子の肩をポンとたたいた。
その後小夜子は、哲夫のお気に入りのお店で一緒に食事をした後、自分の家まで送ってもらった。哲夫は、
「しっかり戸締りをして寝るんだよ。おやすみ」
と言いながら小夜子の肩を優しく抱いた。小夜子は、
「おやすみなさい！」

とにっこり微笑んで自分の部屋に入っていった。
そして哲夫は、三週間前のこととついさっきのことが気になったため、しばらく自宅には帰らず小夜子の家の周りを見張っていることにした。下手をすると、小夜子に自分がダークパンサーだということがばれてしまう危険性があったが、小夜子を守るにはそうするしかないと思っていた。

次の日、誠と一郎が揃って病院から退院してきた。そして哲夫も竜治と一緒にやってきた。
「ただいま〜」
誠がまずリビングに入った。
「お帰りなさい！お父さん、おじさん」
小夜子の声が少し明るさを取り戻した。
「おはよう、かおりから連絡はあったかい」
「ううん、留守電にも何も入ってない」
小夜子は首を横に振った。哲夫は、
「小夜ちゃんに紹介したい人がいるんだ。俺の相棒だけどね」
と言って竜治を呼ぶと小夜子を紹介した。竜治は、
「小夜ちゃんか、黒木と誠から話は聞いている。この前はずいぶんひどい目にあったらしいな。でも元気になってよかった。あ、紹介が遅れたけど、俺は黒沢竜治。フリーの報道カメラマンなんだ」
と小夜子を気遣った後、自己紹介した。
「哲ちゃん、俺たちが入院していた間に何かわかったことはあるかい？」
一郎が聞くと、
「一郎、誠、君たちを襲った奴らの事はまだわからないが、二つだけ辛うじてつかんだことがある」
と哲夫が手帳を取り出しながら答えた。
「何だそれは」
「事件の裏に製薬会社とある大物政治家の癒着があるのをつかんだ

んだ。しかも厚生大臣をしていた代議士だ」
「えっ？まさか、自由民政党の森川光三郎のことか？」
「その通りさ」
目を丸くした一郎に、哲夫はさらりとクールに返した。
「ねぇおじさん、そういえばその森川という人、だいぶ前にも政治献金か何かが明るみに出て、マスコミで大騒ぎになってなかったっけ？」
小夜子が口をはさむと、
「ああ、でもその時は結局うやむやにされちゃったんだよ。俺と哲ちゃんも、真相を探るためにいろいろなところを走り回ったけど、残念ながら一歩及ばなかった。なあ哲ちゃん」
「でも、それ以前にも森川は、厚生省の役人とつるんで何か変な事をやっていたという噂もあるらしい。真偽はわからないけどね」
「呆れたぁ。それで国会で教育再生会議の肝いりで少年法がどうのこうのなんて言っているなんて、バカじゃない」
「それからもうひとつわかったのは、亡くなった患者に投与された薬は、南製薬が出していることだ。その薬はまだちゃんと認可されて、四年位しか経っていないらしいんだよ」
「哲ちゃん、気になることがあるんだ。認可されて四年経っているのに、ここにきてその薬を投与されていた人たちが次々と亡くなるなんて、おかしいと思わないか？　普通副作用がわかった地点で何かしらの報告があって、投与の制限や使用禁止の措置を出すはずだろう？」
「それに普通だったら認可の前に十分調査をするはずよ。絶対にこれはおかしいわ。裏に何かあるわよ、きっと」
小夜子も言った。その目はすごく真剣な表情になっている。
その時竜治が、
「そういえば…」
と言葉を濁しかけた。
「どうした、竜治」、

「昨日取材に行ったときに届いていた変な手紙のことだが、東光大学病院の院長宛てにも、何やら脅迫状らしいものが届いていたらしい。なぁ黒木。実はその薬の副作用で亡くなった人の遺体が、ここ数日毎日のように消えているらしいんだ。まだ確証はないけどね」
「なんだって！」
「竜治の言った『変な手紙』っていうのは、これのことだ」
哲夫はそう言って、コピーを取っておいた例の手紙を、皆に順番に見せた。
「俺たちマスコミに関わる人間と、警察への挑戦状ってわけか」
一郎が声を曇らせた。
「ふざけやがって！」
誠は怒りをあらわにした。
「皆、これは俺の推測だが、誠と一郎、小夜ちゃん、かおりちゃんを狙った奴ら、いや…正確にいえば奴らの黒幕は、東光大学病院での一連の事件の報道と捜査で、ある事がばれることを恐れているんだと思う」
「そうよ！なぜかおりが誘拐されたかわからないけど、絶対今度のこの事件は何か裏があると思うわ。こうなったら私も真相を探ってかおりを助けてやるんだから！こんなひどいことをする悪党に、かおりを殺されてたまるもんですか！」
「俺たちだけでも絶対真相を暴いてやろうぜ」
「小夜子」
その時誠が呼び止めた。
「どうしたの、お父さん」
「あんまりムチャをやらかすんじゃないぞ」
「何言っているのよ。かおりを助けたいだけなのに！」
「落ち着くんだ小夜ちゃん、お父さんは君をこれ以上危ない目に遭わせるわけにはいかないんだよ」
ムッとした小夜子に哲夫が優しく諭した。しかし、哲夫の心は外のさわやかな空とは裏腹に重く沈んでいた。

小夜子は自分の部屋に戻ると声をあげて泣いた。
「かおり、どこにいるの。全く連絡がないから皆心配しているのよ」
かおりを助けるために、悪事を働く大人を懲らしめるために、自分も力になりたいのに、父にも哲夫にもわかってもらえないことに、小夜子は苛立ちすら覚えていた。
「私にダークパンサーのような力があれば…、かおりを助けられたかもしれないのに。一体私はどうしたらいいの？お父さんの力になりたいのに！」
小夜子の苛立ちと悲しみの涙は、枕を静かに濡らしていった。
自分の無力さを悲しむ小夜子。そしてその「力」を持つことと引き換えに、孤独な戦いの中で生きてきた哲夫。二人のそれぞれの悲しみを映し出すかのように、三日月が夜空に青白くきらめいていた。

次の日の十二時ごろ。誠が勤めている警視庁広域捜査課のある部屋に、一本の電話が入った。
「はい、こちら広域捜査課ですが」
誠が受話器を取ると、
「黒田警部でいらっしゃいますか？」
と女性の声が聞こえてきた。
「はい、黒田は私ですが…どちら様でしょうか」
「私、森川光三郎の秘書をしておりました高浜めぐみと申します」
声の主の女性がしっかりした口調で名乗ってきた。
「どうしました？」
「今度の一連の事件に、森川と南製薬が関わっているんです」
「どういうことですか」
「一連の事件で話題になっている薬のことで、トラブルをもみ消そうとして南製薬の社長の白石健太郎が、森川に以前リベートを渡していたんです」
「それで？」
「今度の一連の事件をきっかけに、私は当時の資料を調べ直したの

ですが、とんでもないことがわかったんです」
「というと？」
「その薬は、厚生省から認可を受けた直後からトラブルが起きていて、本来だったらもう使用禁止になっているはずなんです。ところがその薬を販売している南製薬が、森川とその部下の官僚とグルになって、厚生省と中央薬事審議会に圧力をかけていたんです。そのことを知った私は、先日森川の秘書を辞めました。そしていろいろ考えたうえでお電話したわけなんです。でもこれ以上は電話ではちょっと…」
女性＝森川光三郎の元秘書・高浜めぐみは答えた。
「そうですか」
「調べていただけますか。お願いします」
「わかりました」
誠はそう言うとめぐみの電話番号をたずね、メモを取った。
「ご連絡ありがとうございます」
誠はゆっくり受話器を置いた。その時、誠の頭の中に、
「もしかしたら，高浜さんはマスコミにもこの事実を告発しようとしているかも。哲ちゃんは知っているか聞いたほうがいいかな」
という考えがひらめいた。そこで、ちょうど昼食の時間になって部下たちが次々食堂に向かう中、誠は誰もいなくなったところを見計らって自分の携帯電話を出すと、哲夫の携帯電話の番号をプッシュした。
三度呼び出し音が鳴り、その後、
「もしもし、黒木です」
といつもの口調で哲夫の声が聞こえてきた。
「哲ちゃんか、俺だ。今こっちは昼休みだ」
「どうしたんだ。食事はまだなのか」
「実は…東光大学病院の一連の事件に関する告発の電話が、たった今入ったんだ」
「なんだって！」

「しかもその電話の主は、森川光三郎の元秘書なんだ」
「高浜めぐみさんか」
「その様子だと、そっちの社内にも電話があったんだな」
「ああ、俺も今会社にいるところだ」
「今度の事件、なんかとんでもない展開になりそうだな」
「森川光三郎のスキャンダルといい、君たちを狙ってきた『見えない敵』といい、やっかいなことになりそうだな」
「今夜は家に来られるか？大がかりに警察が動くと危険なことになるだろうし、皆にいろいろ話したほうがいいだろう。かおりの事もあるし」
「そうだな。あの件の手紙のことがあるから、下手に警察が大きな動きは出来ないだろう。君もまた奴らに狙われるかもしれない。とりあえずお前のところへ行くよ」
「じゃあ後で」
「ああ」
誠は電話を切った。そして、
「やれやれ、俺たちを襲ったホシはまだ手がかりなしか」
とぼやきながら、食事に向かった。

その頃竜治は、自室でここ二日間で撮ったフィルムを現像していた。
「なんか気になるなぁ」
竜治の目が、ネガから転写された1カットに向けられた。
そのカットには、薬局にあった外来患者に処方されるはずの薬の袋が、ほぼ完全に燃やされた形跡があった。
「いったい何のためにこんなことを…」
竜治はつぶやいた。
「黒木と俊一に電話を入れた方がいいな。まだ社内にいるだろう」
そして竜治はリビングに戻るとすぐ、哲夫の携帯電話の番号をプッシュした。

「もしもし、黒木です」
二回の呼び出し音が鳴ってすぐ、哲夫の声が入ってきた。
「黒木か…俺だ。ちょっと気になることがあってかけたが、今大丈夫か？」
竜治が呼びかけると、
「俺の方は仕事中だけど、とりあえず平気だ。それよりどうしたんだ？」
「実は今、取材で撮った写真を現像していたんだが、一枚気になるカットがあったんだ」
「気になるカット？」
「一昨日東光大学病院で撮った写真の中に、外来患者に処方して渡すはずの薬の袋が全部燃やされていたのがあった」
「なんだって、薬が全部燃やされていただって？」
「黒木、その燃え方が半端じゃないんだ。跡形もなく燃えて棚がひどく焦げ付いて変形しているし、一部が腐蝕しているんだ。普通の火じゃ、いくらなんでもここまではいかないと思って、お前に知らせたんだ」
「よし、わかった。誠には俺の方からも知らせておくよ。あいつも他の事件の事で忙しいみたいだけど」
「そうじゃなくても見えない敵のことがあるからな」
「ああ、俺たちも注意しようぜ」
哲夫が言った。
「じゃあな」
竜治は電話を切った。

「哲夫、今の電話は竜治からか」
「ああ、どうも写真の事で気になることがあるらしい。後で誠にも知らせた方がいいと思う」
「後でその写真を彼からもらってきてくれ。俺は明日その写真を持って取材に行ってみる。あ、そうだ。高浜さんのところを頼む」

「わかった。もうすぐ行く」
「高浜さんは今回のことを、危険を承知で知らせて来ただろうけど、具体的なことを聞いてきてくれないか。それと、もしかしたら彼女を抹殺しようと森川の部下の殺し屋が動いているかもしれない。彼女のガードも頼む」
「よし、わかった」
哲夫は俊一にそう言うと、アタッシュケースを引っ張り出して社会部の部屋を飛び出していった。そして黒のゼファーに乗り込むと、高浜めぐみの家のある自由が丘に向かった。

その頃小夜子は、午前中の講義を終え、学食でいつものようにメキシカンピラフを食べていた。お昼時学生たちはいろんなおしゃべりに花を咲かせているが、小夜子はなんとなく一人になりたい気分だった。そこへ、
「小夜子、今日なんだか様子がおかしいわ。どうしたの」
と中学時代からの親友・桂田ひかるがやってきた。背は小夜子より少し小さいが足が長く均整のとれた体型で、今時ちょっと古風なおさげにパステルグリーンのカジュアルスーツがよく似合っている。
「ううん、何でもないよ」
小夜子は首を横に振った。
「本当のことを言ってよ。誰にも言わないから。ひょっとして…東光大学病院事件の事で何かあったのね」
ひかるは優しく聞いた。
「うん、二度も危ない目に遭っちゃった私。いつも通り学校には行きなさいと言われたから今日は来たけど」
「大けがしたこととかおりちゃんのことは、私もニュースで聞いたわ。　その時小夜子たちを襲った奴らのことが気になるのね」
「お父さんたちが必死になって真相を探っているけれど、今のところ全然手がかりがないみたいなのよ。私もお父さんの力になりたいのにさ、お父さんにはムチャなことはするなって言われちゃった。

かおりのことが心配なのに」
「うちのお父さんも、このごろ事件続きで大変みたい」
ひかるも言った。ひかるの父も警視庁の本庁に籍を置く刑事で、誠とは部署は違い捜査一課に務めているが、第一線で活躍している。だから帰りが深夜になってしまうこともよくあるのだ。
「そうかぁ」
小夜子は少し間延びした感じで言った。
「でも、早く捕まらないかなぁ。犯人」
「学校の行き帰りに危ない目に遭うのなんてごめんだもん」
ひかるが言った。
それを聞いた小夜子は、行方不明になったかおりのことを思い出した。
そして、自分と同じ思いをひかるには絶対にさせたくないと思った。小夜子は二度も「見えない敵」に襲われ、ダークパンサーが助けてくれたものの、一度は殺されかけたのだから。
「私と同じ辛い思いはひかるには絶対にさせたくない。絶対「見えない敵」の正体を暴き出してやるんだから。そして、かおりを助け出して、あの事件の裏にある陰謀も皆で叩き潰してやるわ！」
小夜子は、まだ実体を見せない「敵」そして、金にものを言わせて悪いことを平気でする政治家の企みに強い怒りを覚えていた。
「かおりを助けるためにも、奴らは絶対とっちめてやるんだから」
胸の中に言葉をしまいこみながら、小夜子は自分の拳に力をこめた。

その頃一郎は、東光大学病院の内科医である高校時代からの友人・南原隆行の家を訪ねに向かっていた。その時、一郎の携帯電話の着信音が鳴り響いた。
「もしもし」
一郎が呼びかけると、
「一郎か、俺だ」

と哲夫の声が入ってきた。
「哲ちゃんか、どうしたんだ」
「竜治から気になる電話が入った。一昨日の東光大学病院襲撃事件の事で、気になる写真を見つけたらしいんだ」
「気になる写真か」
「至急竜治の家に向かってくれないか。その写真のことで調べることが出てきそうだから」
「哲ちゃんはこれからどうするんだ」
「俺は、自由が丘に向かっている」
「高浜めぐみさんに会うんだな。誠から話は聞いたよ」
「俺は今から友人のところへ行って来る。東光大学病院で内科医をやっているんだ」
「なんだって！」
哲夫が一瞬びっくりした声を出した。
「そうしたら、例の薬のことを彼から聞き出してくれないか。薬剤師ほどじゃなくても、彼ならば何か知っているはずだろうから」
「そうだな…わかった。あのリストも俺の手元にあるし、そのデータから何かつかめるかもしれない」
「一つその前に教えておくぞ。森川は例の薬のトラブルをもみ消す為に、厚生省と中央薬事審議会に圧力をかけていたらしいんだ」
「南製薬の白石社長とグルになってか？」
「官僚も絡んでいるようなんだ。高浜さんが電話で知らせてきた」
「森川がそんなあくどい事をしていたなんて…。小夜ちゃんが怒るのもわかるぜ」
「まったくだな。絶対に森川を追い詰めような」
一郎の口調が激しくなる中、哲夫はいたって冷静だった。
「ああ、じゃあまた後でな」
一郎はそう言うと電話を切った。

告発

それから一時間ほど経った頃、哲夫は黒のゼファーを走らせ、自由が丘三丁目にある二ＬＤＫのマンションにいた。このマンションの一〇一号室に高浜めぐみが住んでいる。

哲夫が静かにチャイムを押し、

「東西新聞の黒木ですが」

と名乗る。するとしばらくして、

「どうぞ」

と、すらっとした体形の四十代前半の女性がドアを開けた。

高浜めぐみ…彼女は大学卒業後旧厚生省に十年勤務したのち、森川公三郎の秘書になった女性で、英語・フランス語に堪能な一面を持つ。ふんわりと優しげなパーマヘアに色白の顔と上品なボルドーの口紅を塗った口元からは、気品の良さがあふれている。

哲夫は薄めのパステルピンクをベースに可愛らしくも上品なインテリアの部屋に通された。小さめのリビングには白いソファーとガラス板のテーブルが置いてある。めぐみはまだ森川の秘書を辞めたばかりだが、月に二十五万の収入で部屋の家賃は八万。独身のせいかかなりリッチな暮らしをしているようだ。

やがてオーディオラックの上から優しい花の香りが漂ってきた。

「いい香りですね」

哲夫が笑顔を見せると、

「ラベンダーです。アロマテラピーに最近凝っているんですよ」

と言いながら、めぐみがロイヤルミルクティーを出してきた。「あ、ちゃんとリクエストを聞かないでごめんなさいね。大丈夫ですか？」

「気にしないでいいですよ。めぐみさんがどんな好みか僕も知りたかったから」哲夫は優しくフォローすると、ゆっくりとロイヤルミルクティーを一口味わった。そして、

「早速ですが、森川代議士のことで、あなたが内部告発しようとしたことは何かきいてもよろしいですか？」
と切り出した。
「森川のことですか。本当は私は秘書だったのでこの話は口外するのはタブーなのですが、いいでしょう、お話します」
めぐみはソファーに腰掛けると、ロイヤルミルクティーを一口飲んだ。その様子をさりげなく見ていた哲夫は、彼女が思慮深く正直な女性であることを見抜いていた。
「私は森川の秘書を八年間務めてきたのですが、森川には以前政治献金をめぐるスキャンダルがあったというのは黒木さんもご存じだと思いますが、私が今回お話しすることは命の危険にさらされるかもしれないことを承知での話です」
めぐみはそう言うと静かに話を切り出した。
「森川は私が秘書をしていた当時から、南製薬の白石健太郎社長とリベートのやり取りをしておりました。新薬認可をめぐって南製薬に便宜を図っていたこともあるんです」
「新薬？もしかして今ニュースになっている東光大学病院の事件とも関係があるのですか」
「そうです。今の段階ではまだマスコミに公表されてないようですが、一つ抗がん剤として流通している南製薬の製品で森川が認可のためにひそかに動いていたものがあるんです」
「圧力をかけたということですか？」
哲夫は聞いた。
「ええ」めぐみは頷いて続ける。「実はその薬は二〇〇四年の認可当時からも副作用のトラブルが続いていたんです。それを東光大学病院などの大学病院ではすでに把握していて、問題になりかけたんです」
「ではなぜ今までその薬がずっと出回っているのですか？」
「南製薬がクレームをひた隠しにしていたんです。それに内部告発をしようとした社員の首切りもあったようで。実はその薬は治験の

段階からいろいろ問題があったんです」
「おかしいですね。薬事法では重大な副作用があったら必ず報告しなければいけないはずでは？」
「それで私もおかしいと思いまして、自分の出来る中でいろいろ調べてみたんです。そうしたら森川と白石がリベートのやり取りをしていたことを突き止めたんです。私はそれを知って森川の秘書を辞め、いろいろと考えた末にそちらと警察にお知らせしたんです。こんなことがはびこってたら日本は良くなりませんから」
　めぐみは何としても森川の悪事を暴きたい思いからか、身を乗り出すようにして話していた。美しい表情の中、めぐみの瞳は真剣な思いからか、強い光を放っていた。
「わかりました。僕のほうでも詳しく調べてみますが、何か思い出したことがあればまた連絡して下さい」
　哲夫はしっかりうなずいた。
　と、次の瞬間、めぐみの部屋に向けて何者かが石を投げ込んだのを哲夫の目がとらえた。窓ガラスがめちゃくちゃに割れ、
「きゃあっ」
　とめぐみが突然襲い掛かった恐怖に怯え、身をすくませる。
「ここは僕に任せて早くチェーンをかけて！それから安全な部屋に隠れて！」
　哲夫は元刑事らしく落ち着いていた。めぐみに的確に指示を出すとシャドーアクセプターを起動させ盗聴電波が出ていないかを調べ始める。するとある周波数に達した瞬間ハウリング音が鳴った。
　もしかして俺を狙っている奴がいるのか…。いやそうでなければめぐみさんが狙われている。哲夫がそう感じた次の瞬間、目の前でマシンガンの連射音が炸裂し、粉々にガラスが砕け散った。砕け散るガラスと襲いかかるマシンガンの弾丸を哲夫は素早い身のこなしでかわしていく。そして一瞬マシンガンの連射音が止まった。
　間違いない、奴らはめぐみさんを狙っている。そうなるとここにいる俺も狙われるな。そう感じた哲夫は静かに精神を集中させ体を

低く構えた。
　とその時、ベランダから窓を蹴り破るように黒のサングラスに黒のポロシャツ、白のパンツ姿の男が哲夫に襲いかかってきた。その右手にはきらりと光るものがある。哲夫はそれを振りおろそうとする男の右手首をつかんで投げ飛ばすと、右ひじの関節を締め上げた。
「うあっ」
　男が必死に反撃しようとするが、哲夫は光るものを取り上げると、
「お前たちの狙いは高浜めぐみだな」とドスをきかせた。「さては森川光三郎の回しものか！」
「南製薬を告発しようとするものはすべて死んでもらう。それだけだ」
「無駄だったな」哲夫は言い放つ。「すでに彼女は警察にも告発しているんだ。いずれ警察から調べは入るはず」
「くそっ！」
　男はその場に座り込んでしまった。そこへ
「黒木さん、大丈夫ですか」
　とめぐみが現れた。哲夫は男を押さえ込みながら、
「無事でよかった。それより警察を呼びましょう。僕が独自に調べたんですがさっきの僕らの会話が盗聴されている可能性がある」
　とほっとしたもののすぐ厳しい表情に戻って言った。
「はい」
　めぐみはうなずいて深呼吸したあと一一〇番通報した。そして哲夫は自分の携帯電話を取り出して、誠の携帯電話の番号をプッシュした。
　三回呼び出し音が鳴った後、
「もしもし」
　と誠の声が聞こえてきた。
「誠か、俺だ。高浜さんの家が奴らにやられた！俺が何とか一人確保したし、高浜さんも無事だが、奴らはベランダから逃げたからどこへ向かったかわからないんだ。部屋もかなりめちゃくちゃにされ

た。至急来てくれないか。そっちが片付いてからでいいから」
「なんだって！そんなにあせってしゃべることないぜ、哲ちゃん」
「念のために一一〇番通報しておいたが、目黒署の人に盗聴器がないか調べるように言ってくれないか」
「任せとけ！こっちの方から手は打っておく。じゃあな」
誠はそう言って電話を切った。が、その時、立て続けに哲夫の携帯電話の着信音が鳴った。
「もしもし」
哲夫が再び呼びかけると、
「哲ちゃんか、俺だ。今俺も用事を済ませて友人の家に向かっている。竜治から写真をもらってきたぜ」
と一郎の声が入ってきた。
「何かわかったことはあったか？」
「誠の方を通して科警研でも調べてもらったが、あれはおそらく液体火薬かナトリウムが使われたと思う。二枚焼いてもらった。そっちの方はどうなってる？」
「大変なことになったよ。非常事態だ」
一郎の問いに、哲夫は少し早口で答えた。
「なんだって！まさか、高浜さんが奴らに！？」
「そのまさかが起きてしまったんだ。高浜さんは無事だったが、家のリビングをめちゃくちゃにされた。俺が何とか追い払ったけどな。あんまり警察が表立って動くとまずいかもしれないが、念の為に一一〇番通報してから、誠にも連絡しておいた」
「高浜さんが無事だったらよかった」でも、奴らは自分たちのことは言わなかったのか？」
「南製薬を告発しようとする奴は、全て死んでもらうと言ってたが…」
「とにかくこのことは、そっちへ行ってからだ」
「ああ、また後でな」
哲夫は一郎にそう言って電話を切った。

ゼトラマックス

小夜子は午後の講義を終えて家に帰ると、自分のノートパソコンをインターネットに接続し、東西新聞社のホームページにアクセスした。森川光三郎と南製薬のことを調べるためである。トップページを見てみると、東光大学病院での一連の事件はしっかり報道されていた。

「黒木さんのところ、奴らの圧力に負けてないわね」

小夜子はつぶやいた。

「でも、そのためにまた誰かが狙われなければいいけど」

小夜子は記事のサーチを始めた。そしてしばらく検索を続けるうちに、ある記事を見つけ出した。

「これは…」

小夜子は思わず声を上げた。その記事は四年前に書かれたものだが、見出しが次のようになっていた。

「ＺＡＴ１０１　トラブル続きの中「ゼトラマックス」の名で認可の謎」

小夜子は記事を読み進めていくうちに、ゼトラマックスが臨床試験の段階からトラブル続きだったことを突き止めた。そして当時、ゼトラマックスの開発に携わった研究者たちが、次々と謎の死を遂げていることを知った。その死因については大半が自殺と病死ということになっているのだが、その真相については、ほとんどのケースがまったくわからずに謎のままになっていたのだ。

「絶対に怪しいわ、これ。何かとんでもない裏がありそう」

小夜子はすぐさま誠の携帯電話の番号をプッシュした。

「もしもし」

二回呼び出し音が鳴った後、誠の声が入ってきた。

「あ、お父さん？」
「小夜子か、今家からかけているのか？」
「うん、一つ頼みたいことがあるの」
「今仕事中なんだ。また事件なんだ」
「えっ！あ、それならごめん。邪魔しちゃったね」
「ちょっと待って！お前の方でつかんだことがあるのか」
「だから電話したのに！…あのね、南製薬が出した薬のことで調べてみたんだけど、黒木さんの会社のホームページを見てみたら気になる記事があったの。なんか素人から見ても引っかかるところがあってね」
「その記事の見出しを教えてくれないか。哲ちゃんにそのことで問い合わせてみるから」
「『ＺＡＴ１０１　トラブル続きの中『ゼトラマックス』の名で認可の謎』という見出しよ。二〇〇四年七月二十一日の記事だけど、ゼトラマックスの開発に関わった人の謎の死についても触れているわ」
「よし、わかった。すぐに哲ちゃんに連絡してみる」
「ところで、その黒木さんはどうしたの？」
誠が答えたところで小夜子が思い出したように聞くと、
「竜治や兄さんと一緒に一時間ほど前に取材に出かけていったよ」
と誠が答えた。
「わかったわ、危ない目に遭わなきゃいいけれど。お父さんも気をつけてね」
小夜子はそう言ってから、
「じゃあね」
と電話を切った。

その頃一郎は、高校時代からの友人でもある東光大学病院の内科医・南原隆行の家で、哲夫・竜治と合流し、取材に入っていた。誠から連絡を受けた哲夫が中心になってゼトラマックスのことを調べ

てみることになったのである。
「久しぶりだな、黒田」
南原は気さくに声をかけてきた。一郎は哲夫と竜治を紹介した。、そして、
「南原、お前の方でゼトラマックスの処方箋を書いたことはあるか？」
と話を切り出した。すると、
「数回出したことがある。でも今はまったく使っていないんだ」
と南原が答えた。
「といいますと？」
哲夫が聞くと、
「あの薬は、本来抗がん剤として認可されたのは、黒木さん、あなたもご存知だと思います。ですが、あの薬にはおかしな特性があるんです」
と南原が言った。
「おかしな特性？」
「黒木さん、あの薬を使うと、それまでまったく心臓に異常がない人まで心臓発作を起こすことがまれにあります。抗がん剤の役目はちゃんと果たしているのですが、その副作用で亡くなった人もいます」
「南原、そのことをちゃんと院長先生には言ったのか？」
「ああ、院長には言ったし、院長を通じて、あるいは俺自身で南製薬や中央薬事審議会にも問い合わせてみた。でも、南製薬の一般社員のところには確かに苦情は届いていたみたいだったが、中央薬事審議会にはそんな報告はないって相手にされなかったよ。一郎」
南原は答えた。その言葉の端々には、厚生労働省と中央薬事審議会の方針に対する強い不信感が感じられる。
「南製薬の方はどうだったんだ？」
「その時電話をかけた女性社員も上司に報告したらしいが、クレームのことについては知らん振りだったらしい。中央薬事審議会にも

問い合わせたらしいが、『ガセネタでしょう』って相手にされなかったそうだ」
「ひどい話じゃないか」
「ということは、ゼトラマックスの副作用のことを、南製薬が隠していることを中央薬事審議会は公表していない可能性があるんですね」
「ええ黒木さん、院長がクレームをつけた後に中央薬事審議会にも報告したのですが、なぜかそのことについては『問題なし』の所見が出ていたんです。それで、おかしいと思っていろいろ調べてみたところ、とんでもない事がわかったんです」
「何ですか？」
「ゼトラマックスの認可当時に厚生大臣だった森川光三郎が、ある医療カルテル機関を強力にバックアップしていたことです。確か南製薬もその傘下に入っていると思いますが、そのグループの名前は…メディカといいます」
「メディカ？その名前、俺も聞いたことあるぜ」
その時竜治が口をはさんだ。すると、
「黒沢さん、メディカの傘下に入っている聖ホーリー医大病院をご存知ですか？そこが中心になって、ゼトラマックスの臨床試験をしていたんですが、その試験の中で出た遺体を廃棄処分にしていたらしいんです」
と南原が衝撃の事実を口にした。
「廃棄処分！？」
一同は驚きの声を上げる。
「さらに調べて見たところ、ゼトラマックスの臨床試験に関わったメンバーのほとんどが、謎の死を遂げていたんです。私は法医学の勉強もしていたので、その方面に詳しい友人に協力してもらって調査したんですが、死んだメンバーはいずれも毒物を注射された形跡があったんです。多分それば筋弛緩剤だと思います」
「南製薬の社員の人はどうだったんですか？」

「南製薬サイドでも、実は謎の死を遂げた人がいるらしいんですよ。黒木さん」
「わかりました。調べてみましょう」
哲夫はしっかりとした口調で言った。
「そういえば、この写真のことでお聞きしたいのですが、部屋の燃やされ方が普通じゃないんですよ。私は見た限り何かナトリウムのような薬を使っている気がするんですが、何かわかりますか？」
竜治は件の写真を南原に見せた。南原は、
「この燃え方からすると…相手はニトロを改良した薬に火をつけたんじゃないかと思います」
と答えた。
「そうか、森川がゼトラマックスに絡んでいるとなると、東光大学病院の事件も、裏で森川とそのメディカが絡んでいる可能性があるな」
哲夫が言うと、
「そうなったら、メディカの殺し屋が黒幕に命令されて、お前を狙ってくるかもしれないぜ。お前はしばらく行動に注意した方がいい」
と一郎が言葉を続けた。
「ああ」
南原はこっくりうなずいた。すると哲夫が、
「竜治、一郎、俺は一度会社に戻って四年前の事をもう一度調べ直してみる。南原さんのことを頼むぞ」
と言った。竜治は、
「よし、わかった。あ、黒木、写真持っていけよ」
と哲夫に例の写真を渡した。その時、哲夫は何かひらめいたのか、
「もし何かあった時のためにこれをしておけよ。殺し屋が動いている可能性があるなら、何があるかわからないから。いざというときの通信機代わりさ」
と小さなネクタイピンを竜治と一郎、そして南原に渡した。
「えっ！？…そうか、わかった」

竜治は一瞬怪訝そうな表情を見せたが、すぐに納得したのか軽くうなずいた。三人はそれを落ちないようにしっかりとネクタイにはさんで止めた。
哲夫は南原の自宅を出て、黒のヘルメットをかぶった。そしてシャドーアクセプターの通信レーダーシステムを作動させ、東西新聞社へと戻っていった。

その夜、誠は急いで仕事を切り上げ、家に帰ってきた。
「小夜子、ただいま」
「お帰り、お父さん。ご飯出来てるよ」
小夜子はにっこり微笑んだ。
「小夜子、今日の事件、やっぱり盗聴器がしかけられていた」
「えっ！」
小夜子は一瞬絶句した。
「奴らの目的も実体もまだはっきりわからない…怖いわね」
「でも、お父さんは負けないからな」
誠はそう言ってビールをごくっと飲んだ。小夜子が父親の仕事を誇りに思っているのをよく知っているだけに、父親として、一人の刑事として小夜子の思いを裏切ることはしたくないと思っているのである。
その時、玄関のチャイムが鳴った。
「はーい」
小夜子がドアホンを取ると、
「黒木です。お父さんは帰っているかな？」
と哲夫の声が入ってきた。小夜子は、
「ちょうどいいところだったわ。どうぞ」
と言って哲夫を案内した。そして、
「ちょっと待っていて下さいね！今コーヒーを出しますから」
と言ってキッチンに走り、コーヒーを哲夫の席に持って行った。小夜子が誠とかおりと住んでいるこの家のＬＤＫは落ち着いたクリー

ム色を基調としたこじんまりした作りになっており、丸みを帯びたテーブルに椅子四つが並んでいる。
「誠も毎日大変だな。体は大丈夫か」
哲夫がさりげなく気づかうと、
「今日はこれでもまだ早いほうなんだ。ひどい時には、小夜子とかおりが寝た後に帰る事だってザラなんだから」
と誠が言った。小夜子は、
「お父さんも黒木さんも早く食べなきゃ。冷めちゃうわよ」
と少し怒ったふりをして言った。誠は、
「じゃ、食べながら話を進めるとするか…。南原さんから聞き出せたことはどのくらいあったかな」
と切り出した。哲夫は、
「ゼトラマックスのことだが、あの薬は抗がん剤としての役目はちゃんと果たしているらしいんだが、心臓発作に似た症状を起こすことがごくまれにあるらしいんだ」
と言った。
「なんだって！」
「しかもそれまでまったく心臓に異常のなかった人に、その副作用で亡くなった人がいるみたいなんだ」
「そんなことがわかっているなら、何で厚生労働省と中央薬事審議会が黙っているんだ」
「そうよ、絶対おかしいわ！」
哲夫の言葉に誠が疑問をぶつけ、小夜子も続いた。
「しかも、南原さんが南製薬にクレームをつけたところ、上司がまったく対応しなかったらしい。中央薬事審議会もガセネタとしか言わなかったそうだ。それと…もう一つ新しいことがわかった。誠、ゼトラマックスが認可された頃に、森川光三郎がある医療カルテルを強力にバックアップしていたらしい」
「えっ！森川光三郎が！？…そのカルテルの名前はわかるか？」
「メディカって言っていたぞ」

「メディカか…。実はなぁ…そこに関する胡散臭い話があって、今本庁でも捜査を進めているんだ」
「そのメディカの実体が怪しいと言うのね。お父さん」
「ああ、表向きにはガンやエイズの治療のための研究をしていることになっているけど、変な噂が絶えないんだ」
「そういえば、大事なことを忘れてた。誠、南原さんが言ってたが、聖ホーリー医大病院が中心になってゼトラマックスの臨床試験をしたらしいんだが、その試験の中で出た遺体を廃棄処分にしていたらしいぞ。しかもその病院はメディカの傘下に入っている」
「ええっ！」
小夜子と誠は、哲夫の言葉に思わずすっとんきょうな声を上げた後、お互いの顔を見合わせた。
「それだけじゃない。ゼトラマックスの臨床試験に関わった人や、南製薬の社員にも謎の死を遂げた人がいるんだ。しかも皆筋弛緩剤を注射された形跡があるそうだ」
「お父さん、その変死した人のこと、もっと調べてみたらどうかしら。絶対に怪しいよ。そのメディカというところ」
「もう少し証拠が集まれば、お父さんのところでも詳しい捜査ができるのになぁ。ちくしょう！かおりのこともあるっていうのに！」
誠は悔しそうに唇をかみしめた。捜査を必死になってやっているにもかかわらず、事件の手がかりはつかめても、そこから先に進まないもどかしさを誠は感じていたのである。
「誠、あせることはないさ…今下手に動いたら、かえって犠牲者が増えるだけだ」
「変死した人のこと、私たちで調べてみようよ。うまくいけば森川の悪事だって暴けるわ。今くよくよしても仕方ないじゃん。お父さんらしくないわ。あきらめちゃダメよ！」
小夜子も言った。小夜子はこういう時になると強気になることが多い。
「そうだな、やるだけやってみるか」

誠は気を取り直して言った。
「じゃあそうしたら、メディカの本部は何とか特定出来ているから、森川と白石とメディカのつながりを調べるだけだな」
その時、
「うわーっ！」
と竜治の悲鳴が、哲夫のシャドーアクセプターに入ってきた。
「竜治、どうした！」
哲夫が呼びかけると、
「奴らが出やがった！南原さんをマークしていたらしい」
と竜治が息を切らしながら答えてきた。
「なんだって！」
「さっき、南原さんとお茶を飲んだ後に、南原さんが急に眠くなったらしくって、部屋で休もうとリビングを出て行ったら、奴らがその向こうの部屋のガラスを割って襲ってきたんだ」
「俺たちも抵抗したんだが、そのお茶自体に何か入っていたらしくって、思うように動けないんだ」
と竜治の言葉に間髪入れずに一郎も答えてきた。
「ちくしょう、奴らに先手を打たれたか！」
誠はそれを聞いて悔しそうにテーブルをたたいたが、すぐに
「兄さん、竜治、慌てるな！南原さんをガードして！」
と冷静になって言った。その時、哲夫のシャドーアクセプターに、
「うわっ！ちくしょう…覚えていろ。森川と南製薬の邪魔をする奴は絶対抹殺してやる」
と殺し屋らしき男の声が入ってきた。そして通信もここで途絶えた。しかし哲夫は、
「誠、大丈夫だ。竜治と一郎は無事だ。もちろん南原さんも大丈夫。それに奴らは俺が竜治たちに渡したネクタイピンに気づいてない」
とシャドーアクセプターを見ながら言った。
「えっ？哲ちゃん、どうしてわかるんだ」
「誠、実はあれは、小型通信機であると同時に小型発信機でもある

んだよ。南原さんの家のあるところをレーダーで調べれば、竜治たちがどうなっているかすぐわかるのさ。もし殺し屋たちに竜治たちがそれを奪われても、俺のこのアクセプターでちゃんとわかる」
「やるじゃん、黒木さん！」
小夜子が言った。
その時、リビングの電話が鳴った。誠が受話器を取り、
「はい、黒田です」
と言うと、
「津上です。例のことですが、メディカと国が中心になったあるプロジェクトに森川と南製薬の白石社長が共同出資していたことがわかりました。南製薬の社員の人に聴取してわかったんです。」
と誠の後輩の警部補・津上圭一郎が答えてきた。
「本当か！やったじゃないか」
「それで、よくよく話を聞いてみると、どうも目的はそれなりにしっかりしているんだけど、実体が怪しいみたいなんですよ。それがゼトラマックスの事とも絡んでいるらしいんです」
「なんだって！ゼトラマックスと絡んでいるだと？わかった。それより南原隆行さんの家が襲われた。至急向かってくれないか」
「わかりました」
圭一郎はしっかりとした口調で答えて電話を切った。
誠はリビングの方に戻ると、
「哲ちゃん、メディカと国が中心になったプロジェクトで何か思い当たるのはないかな」
と哲夫に聞いた。すると、
「うーん、コードネームがシグマというものだったらはっきり聞いたことがある。確かそのプロジェクトが完了した直後にゼトラマックスが認可されたんじゃないかな。取材したことあるぜ」
と哲夫が答えた。
「ええっ！」
小夜子が驚いてスープをこぼしそうになった。あわててそのスー

プを一口すする小夜子だが、スープは少しさめて冷たくなりかけていた。
「確か遺伝子工学を応用した難病治療のための研究だったと思う」
哲夫が更に言葉を続けた。
「でもさぁ、抗がん剤として認可されたゼトラマックスで、ここ数日死亡事故が起きているでしょう？それに、プロジェクトが完了した直後にゼトラマックスが認可されているなんて、なんか不自然よ。ね、お父さん」
「そうだな。おまけに臨床試験の中で出た遺体を廃棄処分にしていたなんて、下手したら死体遺棄で逮捕だよ。なんかやっぱり怪しいぜ。哲ちゃん」
「俺も実はそのことが引っかかって、今までいろいろ調べてきたんだけどね。でもこれで、メディカと森川、白石のつながりがはっきりしたぜ。君と小夜ちゃん、そして一郎・竜治・高浜さん・南原さんを狙ったのはきっとメディカの殺し屋だ。かおりちゃんを誘拐したのもね」
「ええっ！」
「なんだって！」
小夜子と誠が驚いて顔を見合わせた。
「黒木さん、どうしてメディカがそんなことまでやる必要があるの？」
「おそらくメディカの黒幕の命令だろうな。マスコミや警察関係の人間を狙った殺人事件も奴らが絡んでいると思うから」
「だとしたら、奴らの狙いはゼトラマックスの秘密を知り、それを告発しようとする者を抹殺することか。何とか食い止めなくては」
誠が言った。かおりを助けなくてはという父親としての思いと、メディカの陰謀を何としても阻止しなければという刑事としての思い、その思いが誠を真剣な目つきにさせていた。
その時リビングの電話が再び鳴った。
「はい、黒田です」

誠が受話器を取ると、
「結城です。課長、女性の遺体が日比谷公園で見つかりました」
と部下の一人である結城ありさが報告してきた。
「なんだって！わかった、すぐ行く」
誠はそれだけ言うと電話を切り、リビングに戻ると、
「小夜子、また事件だ。ご飯先に食べて寝てなさい」
と言って支度を始めた。
「ええっ、また事件？あーあ、せっかく久しぶりにご飯一緒に食べられると思ったのに」
小夜子ががっかりしたように言った。
「誠、どうしたんだ」
「哲ちゃん、日比谷公園で女性の遺体が見つかったらしいんだ。すまないが小夜子のことガードしてやってくれないか。殺し屋が動いているとしたらこの家が狙われてもおかしくないから」
「よし、わかった」
哲夫はうなずきながら答えた。小夜子は、
「よかった、一人じゃやっぱり心細いもん」
と言った。

陰謀

ちょうどその頃、新橋のオフィス街近くにあるその病院は患者たちが寝静まる中、一つの部屋だけこうこうと明かりがついていた。聖ホーリー医科大学付属病院…ここはすぐ近くに聖ホーリー医科大学のキャンパスがあり、ここ四、五年でガンの治療や難病の治療の研究で大きな成果を上げている。しかしその社会での高い評価の裏で、ここの医局では恐ろしい計画が進められていた。内部では中肉中背の白衣姿の男、白髪交じりのグレーのスーツ姿の男、やや青白い顔をした紺のスーツの男がソファーで密談していた。

「白石社長、ゼトラマックスのことで厄介な動きはないか」

「はい、今のところは何とかなっております。ただ東西新聞の連中が我々の動きを探り出そうとやっきになっているようです」

「森川先生、そちらの方は？」

「中央薬事審議会にはにらみをきかせてある。ゼトラマックスの事を公表したらメンバー全員を降ろすと」

「私の方も殺しのプロを町に放ってある。我々の計画をかぎつけた者は全て抹殺するつもりでな」

「そうして頂かないと私どもも困ります。あの薬にはわが社の社運がかかっているんですから」

「私もゼトラマックスの秘密が知れたら、政界にいられなくなる」

「その辺は心配なく。森川先生、白石社長。私のほうですでに手は打ってある」

「しかし、ゼトラマックスが恐るべき毒をもつ殺人兵器のような薬とは誰も思わないでしょう」

「何せ表向きには抗がん剤として出しているわけだし、ちゃんと抗がん剤としての機能は果たしていますからね。その薬に人間の体に著しい変化を起こす作用があるとは気づかれまい」

この話をしていたのは、自由民政党の代議士で元厚生大臣であっ

た森川光三郎、南製薬の社長・白石健一郎、そして聖ホーリー医科大学学長の顔を持つ、医療機関メディカのナンバー3・東郷裕一の三人である。
「ですが、ひとつだけ気になることがあります」
「気になることだと？」
森川の言葉で東郷が険しい顔を見せる。
「近頃噂になっている闇の仕置人・ダークパンサーです。巷では現代の黒騎士と呼ばれているようですが…」
「なにっ！」
白石の言葉を聞き、東郷の表情がガラッと変わった。
「どうしたのですか、東郷先生」
「そいつの邪魔が入ったせいで、高浜めぐみと南原隆行を始末し損ねた」
と東郷は悔しそうに顔を歪ませた。ブルーのサングラスの奥で、その目は真っ赤に血走っている。
「高浜は私の秘書だったが、いまや裏切り者…。あの女は私が白石社長からリベートを受け取っていた事を東西新聞社と警察に告発したらしい。このままあの女を野放しにしていたら、我らの計画にも支障が出てくる」
森川は苦虫を噛み潰すように言った。部下だった者の裏切りに対するショックと恨みで、心なしか声が上ずっている。
「それにダークパンサーにも消えてもらわねば…何としても」
「ダークパンサーを知っているのか」
「夜ごと現れては法で裁きにくい悪を懲らしめているらしい。でも正体は誰にもわからない。だが彼にゼトラマックスの秘密を知られたらまずい事になる。だからこそ警察とマスコミの動きを封じる必要があるというのに。あの女は告発に出てきた。このままでは私の立場が危なくなるのも時間の問題だ」
「そうなると高浜めぐみにも消えてもらわねばなりませんな」
「まあそれについてはこの東郷を信じて下さい。総帥にご報告して

おきますが、総帥のことです。きっと手は打ってあるでしょう。私の方からも手は打っておきます。今に東光大学病院も大変な事になりますから」
　東郷は冷静な口調で言った。そして、
「水沢…いや、シルバーホーク」
　と一人の男を呼んだ。
「先の任務ご苦労だったが、又お前に頼みたいことがある。お前は今東光大学病院にいるが、その関係者の動きを探って欲しい」
「南原先生のことでしょうか。それなら私めにお任せを。看護婦たちの動きもマークしておきます」
「もし不審な動きを見せた者がいたら、発見次第即刻抹殺しろ。例え仕事の仲間であろうとも」
　東郷は強い口調で言った。
「ははっ！」
　シルバーホークと呼ばれた男がこっくりとうなずいた。
　だが、この時三人のやり取りを、監禁されていた部屋の小さな隙間からじっと息を殺して見つめていた少女がいた。かおりである。
　彼女は三週間前にここに連れてこられて以来、ほとんど食事をとっておらずかなりやせてしまっていた。更に一度脱出を試みようとして失敗してしまい、殺し屋たちからのリンチにあって、傷だらけの身体で森川たちのいる部屋の隣にある狭くて薄暗い部屋にロープで身体を縛られて監禁されていたのである。かおりはＰＨＳを持っていたが脱出に失敗してリンチにあった時にそれを壊されていた。その為に小夜子と誠に自分の居場所を知らせることが出来なかったのである。
「奴らは一体何のためにゼトラマックスを…真実を知らないまま死んでしまった人がかわいそうだわ。許せない！でもこのままじゃ終わらないはずよ。絶対チャンスは来る！」
　かおりは森川たちの企みに怒りを覚えていた。しかしその一方で逃げ出せるチャンスが必ず来る事を信じていた。

誠は日比谷公園の遺体発見現場に来ていた。
「警部！」
誠に連絡をしてきた広域捜査課の巡査・結城ありさが、誠の元へ駆け寄った。
「ありさか、お疲れ様。遺体の身元はわかったか？」
「川島理恵さん、三十歳です。東光大学病院の看護婦です。後もう一人は北原悠里さん、川島さんと同い年で、中学時代からの親友だったそうです。死亡推定時間は午後八時ごろ、別の場所で殺されてここへ運ばれたのではないかと思われます」
「そうか…同級生か。その二人の遺留品で何か気になるものはあったのかい？」
「この手紙です」
ありさはそう言って、川島理恵の遺体のそばにあった手紙を誠に見せた。

ゼトラマックスをどうして禁止しないの。南原先生は必死になって、真相を探っていると言うのにどうして誰も知らないふりをしているの。悠里たちもあの薬が恐ろしい副作用を持っているのを知っているのに。早く警察に知らせなければ。

手紙の文面にはこれだけが手書きで書かれていた。
「もしや、北原さんは？」
「北原さんは、南製薬の新薬開発研究員でした。ゼトラマックスの開発にも関わっていたのではないかと思います」
「ちょっと遺体を見せてくれないか」
誠はそう言って、遺体の上にかぶせてあった青いシートを外した。ガサッと音をさせながら現れた遺体にはそれぞれ五ヶ所以上にわたってナイフか包丁で深く刺された跡があった。
「ひどいことしやがるぜ」

誠は怒りをかみ殺すようにつぶやいた。その時、
「警部、北原さんのかばんから、こんなものが」
とありさが一枚のディスクを誠に見せた。
「ん？もしかしたら…これはゼトラマックスの秘密を解く鍵になるかも知れない。すぐに戻ってデータを調べてみる必要があるな。あ、ちょっと待っていろ」
誠は何かひらめいたのか、さっと自分の携帯電話を取り出し、自宅の番号を呼び出した。
「もしもし、黒田です。あ、お父さん？どうしたの？」
呼び出し音が三回鳴った後、小夜子の声が返ってきた。
「今日比谷の方にいるけど、ゼトラマックスの秘密を解く鍵が見つかりそうだから、お前と哲ちゃんにも協力して欲しいんだ。哲ちゃんはそばにいるか」
「うん、今ちょうどそばにいるわ」
「よし、お父さんは仕事場に一旦行くけど、着いたらお前のノートパソコンにゼトラマックスの秘密を解く鍵になるディスクのデータを送るから、それを哲ちゃんの新聞社宛てに転送してくれないか。哲ちゃんたちの方でも取材でそれが必要になるかもしれないから」
「いいわ」
「じゃあな、小夜子。なるべく早く帰るから」
誠は父親の顔に戻って言った。

それから一時間ほどたった頃、小夜子は自分のノートパソコンを立ち上げ、誠からのメールを受け取った。メールの内容はこの様なものだった。

小夜子へ
お父さんたちが日比谷の遺体発見現場で見つけた被害者の持っていたディスクに入っていたデータを添付するよ。
ちなみにお父さんの仲間が調べたところによると、殺された二人の

被害者・川島理恵さんと北原悠里さんの死亡推定時間は午後八時ごろで、別の場所で殺されてここへ運ばれたらしい。ちなみに川島さんは東光大学病院の看護婦で、北原さんは南製薬の新薬開発の研究員だったそうだ。ゼトラマックスの開発にも関わっていたみたいだぞ。
哲ちゃんにも同じものを送ってあげて欲しい。
ただしこのメールは取り扱いに十分注意して欲しい。頼んだぞ。
お父さんより

「また犠牲者が出てしまったか」
哲夫は悔しそうにつぶやいた。
「でも川島さんが東光大学病院の看護婦、北原さんが南製薬の関係者となると、かなりこの事件の核心に近づいたわよ。きっと」
小夜子が言った。
「そういえば、一つ気になることがあるんだ」
哲夫が添付されてきたデータを見ながら言った。
「東光大学病院の中で薬局はやられたことはあっても、薬剤師の中にまだ被害者が出ていない。でも普通だったら、病院の中で薬の秘密を知っているのは、看護婦さんより医者や薬剤師だろう？」
「そういえば確かにおかしいわね。私も病院の薬局のクラークをしている友達を知っているけど、薬剤師の先輩から色々話を聞いているみたい。抗がん剤っていろいろな輸液や注射や点滴に使う水と混ぜて、薄めて使うことが多いんだけど、ゴムの手袋をして調合の作業しないと危険なんだって」
小夜子が言った。
その時リビングの電話が鳴った。
「もしもし、黒田です」
小夜子が慌てて電話を取ると、
「小夜子か、お父さんだ。メールで被害者のことは知らせたけど、司法解剖の結果、その被害者の血液の中から、抗がん剤が検出され

たんだよ」
「えっ、抗がん剤が！？」
「もしかしたら…その薬はゼトラマックスかもしれない。死因自体はナイフで刺された傷なんだけど。その前に何かされた可能性があるな。ちょっと哲ちゃんを呼んでくれないか」
「待ってて、今代わるから」
小夜子は哲夫に受話器を渡した。
「誠か、どうしたんだ」
哲夫が聞くと、
「司法解剖の結果、被害者の二人の血液から抗がん剤の成分が検出されたんだ。二人とも皮膚の細胞が一部崩れ落ちてる」
と誠が答えた。その声は心なしか激しい怒りを帯びていた。
「ひどいな、なんてことだ」
「二人ともかなり激しく抵抗したみたいで、衣服はかなり乱れている。信じたくないが、もしかしたら東光大学病院の職員の中に、犯人がいる可能性があるな」
「犯人はどうかわからないが、抗がん剤を注射されたか、体にかけられた可能性はあるな。小夜ちゃんが教えてくれたんだけど、抗がん剤っていろいろな輸液や、注射や点滴に使う水と混ぜて薄めて使うことが多いらしいが、ゴムの手袋をして調合作業しないと危険みたいだぞ。いや実は俺と小夜ちゃんも気になった事があるんだよ」
「どういうことだ？」
「誠、以前東光大学病院の中で薬局はやられたことはあったけど、薬剤師の中にまだ被害者が出ていない。でも普通だったら、病院の中で薬の秘密を知っているのは、看護婦さんより医者や薬剤師だろう？普通だったら薬剤師が医者に処方の事で意見することだってあるはずなのに、薬剤師が告発しないのは変だと思わないか？」
「そういえば…確かにそうだな。こりゃあややこしい事になりそうだな」
「とにかく明日、東光大学病院にあたってみるぜ」」

「ああ」
哲夫の言葉に誠はうなずいてから、
「帰りが遅くなりそうだけど、小夜子の事頼むぞ」
と言って電話を切った。その時、
「黒木さん、このデータ見てよ！」
と小夜子が叫んだ。受話器を置いた哲夫が、
「どうしたんだ」
と聞くと、
「やっぱりこれ、どう考えてもおかしいわ。臨床試験でも薬の組み合わせによるだろうけど、ゼトラマックスがちゃんと効いた患者さんは、あんまりいないみたいだもん」
と小夜子が言った。
「どれどれ」
哲夫が小夜子のパソコンを覗き込むと、いろいろな種類の抗がん剤と、ゼトラマックスを比較したデータが表示されていたが、他の抗がん剤に比べてゼトラマックスが効くタイプと効かないタイプがはっきり分かれており、しかも効果もあるが副作用が桁違いに出やすいことが、試験結果で明らかになっていた。
「うーん、確かにこれはちょっと実用化する薬の臨床試験結果にしては極端だし、ちょっと副作用が多すぎるね。それなのにどうして認可されてしまったのか、そしてこうやって告発しようとしてる人が殺されている。やっぱり何か裏がもう一つあるな」
哲夫はしばらく考え込んだ後確信に満ちた表情で言った。その目はいつも以上に鋭い光を放ち、口調もしっかりしている。
「えっ！？黒木さん、どういうことなの？」
「東光大学病院の関係者にも、メディカにつながってる人間がいるぞ。しかも仕事は薬剤師だ。川島さんを殺したのはきっと同僚だろうな」
哲夫は更にしっかりとした口調で言った。しかしその目はどこか悲しげになっている。

「そんな…人の命を預かっている仕事をしてる人がそんな悪事に関わっているなんて信じたくない！」
小夜子は悲しそうに怒りをぶつけると、哲夫が止めるのを振り切って泣きながら自分の部屋に駆け込んでしまった。
「小夜ちゃん…すまない。君も死にかけたところを医者や看護婦さんに助けられて元気になったばかりだったのに…。ごめんな」
哲夫には小夜子が怒ったわけが痛いほどわかっていた。あの夜、あと十分病院に着くのが遅かったら、自分の命はなかったかもしれない。実は小夜子はその時お世話になった看護婦から聞いた話を、後で誠と哲夫に打ち明けていたのである。小夜子はその時の事を思うと、病院で人の命を預かる人が悪事に関わっているという事を信じたくなかったのである。哲夫もその気持ちが痛いほどわかるだけに、やりきれない思いで一杯だった。

次の日哲夫は東光大学病院に向かうと、薬剤部を訪ねた。その時、
「黒木か、久しぶりだな」
と一人の男が声をかけてきた。
「君は…」
哲夫は一瞬驚きの表情を見せた。人一倍記憶力のいい哲夫だけに、はっきりと聞き覚えのある声だったのである。だが次の瞬間、
「光山じゃないか！」
と哲夫は懐かしそうに笑顔を見せた。哲夫に声をかけてきた男・彼こそ哲夫の幼なじみの光山聖純だったのだ。
「二十五年ぶりだな。刑事を辞めたと聞いてびっくりしたけど、新聞記者で頑張っているとはな。正義感の強いお前らしいぜ」
光山が懐かしそうに言った。
「まさか、お前がここで働いているとは思わなかったよ」
哲夫も信じられないと言うような表情で言った。
「お前は大学を出てすぐに刑事になったけど、あれから俺は薬科大学に入り直したんだ。その後薬剤師になってから二つ病院を変わっ

て、今ここでチーフをしているんだよ。親父がガンで亡くなったから、何とか病気の人たちのために力になりたくてね」
「そうか…。お前も苦労していたんだな」
哲夫はポンと光山の肩を叩いた。そして、
「早速なんだけど、聞きたいことがあるんだ」
と用件を切り出した。すると光山は、
「ああ、ゼトラマックスのことか。ここじゃ話しにくいし、お昼だから外に出よう」
と言って哲夫を食堂に案内した。
「黒木、あの薬は、俺たちの方ではとっくに治療に使うのは中止すると決定したはずなのに、一人変な行動をしている奴がいるんだ」
「変な行動？」
「実は俺は会議でその話をした日に当直だったが、夜中に少し休憩しようと外に出ようとしたところを黒覆面の奴らに襲われて抗がん剤をかけられたことがあるよ」
「えっ！」
「すぐにお風呂に駆け込んでシャワーを浴びて次の日皮膚科の先生に診てもらったから、大事には至らなかったけど、それ以来部下の様子までおかしくなっちゃったんだよ」
光山が心配そうに言った。
「自分も何かされると思っているのかもしれないな」
「大丈夫、俺たちも警察も頑張っているから、それだけは信じろ」
哲夫はそう言って光山の肩をポンと叩いた。
が、その時、一発の銃声がにぎやかなランチタイムを一瞬にして恐怖の時間に変えた。
「きゃあっ！」
悲鳴をあげながら食事をしていた客が逃げ出す。
「一体どうなっているんだ」
光山が戸惑いの表情を見せる。
「光山、すぐここから一旦避難しろ！ガードマンの人を呼ぶんだ！」

哲夫が黒覆面の男を見つけ、とっさに叫ぶと男の方向へ自分のボールペンを投げ込み、男に飛びかかった。そして男と格闘しながら、男が哲夫に向けた注射器を奪い、自分の背広に入れると、
「えいっ！」
と男の腹にパンチを打ち込んだ。
男が気絶したのを見計らって立ち上がると、哲夫はそっとその場を離れ、光山を探した。しかし、しばらく歩いたところで光山はお腹を押さえながら倒れていた。その白衣はかなりの出血のせいか血で汚れている。
「光山、どうした！」
「ガードマンを呼びに行って戻ろうとしたら、いきなりナイフでやられた」
「光山、お前がかけられたのはこの注射器の中のものか」
哲夫が注射器を見せながら更に聞くと、光山は黙ってうなずいた。
「ちょっと待っていろ」
哲夫はそう言うと、自分の使っている大判のハンカチーフでしっかり止血帯をしばり、受付に駆け込んだ。そして戻ると、
「すぐに仲間の先生が来る。安心しろ。俺は友達に連絡してくるからな」
と言って玄関を出た。そして、一一〇番に通報した後、誠の携帯電話を呼び出した。
「もしもし」
三回呼び出し音が鳴った後、誠の声が入ってきた。
「誠か？俺だ。今東光大学病院にいるが、食堂が発砲にあった。あと俺の幼なじみが襲われた」
「え、なんだって！？名前と仕事はわかるか？」
「光山聖純、偶然だけど東光大学病院の薬剤部のチーフだよ」
「本当か。助かって欲しいな。ゼトラマックスの秘密と内部事情をよく知っているだろうから」
「そこで頼みたいんだが、ガードマンが二十四時間体制で警備して

いるとはいえ、何があるかわからん。だから、ここは広域捜査課の出番だと思ってね」
「よし、そっちは俺たちに任せろ。今ちょうど哲ちゃんの後輩でもあった圭一郎を除いて皆揃っているから、すぐ準備する」
誠は任せとけと言いたそうな口調で答えてきた。
「頼むぞ」
哲夫はそれだけ言って電話を切った。

秘密

その頃小夜子は、講義を終えて家に帰る途中、城北学院大近くの喫茶店・ボンジョルノでコーヒーを飲んで一休みしていた。
「おじさん、モカブレンドおかわり！あと、ホットケーキちょうだい！」
小夜子がニコニコしながら呼びかけると、
「はいよ！すぐ出来るから待っていてね」
とマスターである谷村が、くりくりした目を細めて優しい声で言った。
「お父さんも毎日大変だね」
「もう捜査が忙しいみたいで、ここ二、三日一緒にご飯食べてないの」
谷村の問いかけに小夜子は少し寂しそうにつぶやいた。
「かわいそうに…、刑事も因果な仕事だね。家族と遊んであげたくても出来ないんだから。お父さんも口には出さなくても寂しいんじゃないかな。でも小夜ちゃんとかおりちゃんが、それでも元気に大きくなってくれたんだし、お父さんは嬉しいんじゃないかな」
谷村は慰めるように言った。その時、ドアの呼び鈴がチリンとなり、
「おやっさん！いつものアメリカンちょうだい！」
と元気のいい男の声が響いた。
「お、暁君じゃないか！今日は先客がいるんだよ。ちょっと待っていろ」
谷村はそう言って男にカウンターに座るように促した。
「小夜子…！どうしてここにいるんだよ」
男は小夜子を見つけ、驚きの声を上げた。
「暁！ここで会うなんて珍しいわね」
小夜子もびっくりしたように言った。小夜子と暁＝神崎暁は、高

校時代からの友達でもあり、バンド・フラッシュの仲間でもある。暁はフラッシュではギターを弾いているが、特撮ヒーロー好きで大の仮面ライダーファンでもあるのだ。
「小夜子、実は俺もここにはよく来ているんだ。それより体大丈夫か？」
「うん、もう大丈夫。でもお父さんが忙しくて、一緒にご飯食べられなくて寂しいんだ」
「そうだよな、小夜子は母ちゃんがいないんだもんね。それに親父さんは警察官…。でも親父さんのような人がいるから皆安心して暮らせているんだしさ、大事な仕事だと思うぜ。いくら最近警察の不祥事が多くても、親父さんは親父さんなりに頑張っているんだぜ。元気だそうな」
「うん」
暁の言葉に優しくうなずいて、小夜子はモカブレンドを一口飲んだ。

哲夫の素早い行動で光山は一命を取りとめ、病室に担ぎこまれていた。
「お前のおかげで助かったよ、黒木」
「なあに、友達じゃないか。俺も危うく何か注射されかけたけどな」
光山のお礼の言葉に、哲夫は少し照れくさそうに言った。
「黒木、警察の人が来たら、その注射器を刑事さんに渡してくれ。お前と組み合った相手がわかれば、誰が何の目的で俺を狙ったかわかるはず」
光山はしっかりした口調で言った。その時、
「光山先生、大丈夫ですか」
と病棟の看護婦である小山が駆け込んできた。
「俺の友達が殺し屋らしい連中から奪い取った注射器があるんだが、ちょっと中身を見てくれないか。彼も一歩間違えれば、殺し屋にそれを注射されかねなかったから」

光山は薬剤師の顔に戻って言った。
小山はすぐに手袋をした手で注射器を持って慎重に中身を見た。
そして、
「先生、どういうことですか？これ、ゼトラマックスが混入していますよ」
と目を丸くして言った。
「なんだって！」
哲夫と光山がほぼ同時に驚きの声を上げた。
「薬剤部ではもうゼトラマックスは使わない事になっていましたよね。それにカンファレンスでも、ゼトラマックスの使用中止を決めたはずなのに、どうしてなんですか？」
小山は何がなんだかわからないようで、困惑した表情を見せていた。そこへ、
「警視庁広域捜査課の黒田です」
と誠が一礼して入ってきた。
「哲ちゃん、まだ病院にいたんだな」
「ああ、光山のことが心配になってな。実は俺も食堂を狙ってきた殺し屋とやりあったが、その時に何か注射されかかったんだ」
誠の言葉に、哲夫はいつもの冷静な口調に戻って答えた。
「たくさん相手がいたらどうするんだよ。ムチャしやがって…で、その注射器の中身はなんだったんだ」
「黒木が注射されかけたのはゼトラマックスらしいんです。黒木、見せてやれよ」
光山が言った。
「薬剤部ではもうゼトラマックスは使わない事になっていたんです。それにカンファレンスでも、ゼトラマックスの使用中止を決めたはずなのに、どうしてこんなことが」
と小山が泣きそうになりながら訴えた。
「誠、光山が殺されかけて、俺がゼトラマックスを注射されかけたとなると、犯人はゼトラマックスの秘密をもっとよく知っている人

間の可能性があるぜ。そうでなきゃ、病院で決めた事を無視してまで、ゼトラマックスを使うなんて出来るわけがない。何か恐ろしいことが裏にあるな」
「ああ、仮にメディカが絡んでいるとして、光山さんが生きているのを黒幕が知ったら、殺し屋をまた差し向けてくるかもしれない」
哲夫の言葉に誠は静かな戦慄を感じていた。その時、
「刑事さん、黒木、俺はゼトラマックスを臨床試験でうちの病院で使っていた時から、副作用のことが引っかかっていたんだ。俺の同期の内科医である南原もそれに気づいていたんだ。あの薬は下手な使い方するととんでもない事になる。筋弛緩剤に似た作用が引き起こされて、そのために亡くなった人がたくさんいるんだ」
と光山が思いがけない事を口にした。
「なんだって！」
誠はそれ以上の言葉が見つからなかった。
「臨床段階から問題になっていたのに認可されてしまったから、俺もおかしいと思って色々調べていたんだが、俺にも家族がいるから、やむを得ずここまで告発せずにいたんだ。悪い奴らに狙われて殺されたら、娘たちがどんな思いするか…。でも、もっと早く勇気出していればこんな事にならなかったかもしれない」
光山は苦悩に満ちた表情で、仕事に対する苦悩と娘たちへの愛を口にした。
「そんなに自分を責めるなよ。お前の気持ちは痛いほどわかるぜ。後は誠に任せろ。俺が警察時代に同期で一緒だった仲間だが、彼なら絶対信頼できるから。力になってくれるぜ」
哲夫は慰めるように言った。誠も、
「大丈夫ですよ。ゼトラマックスの秘密はこちらでも科警研を通して今調べています。悪いようにはしませんから、安心してください」
と言って、そっとハンカチを差し出した。
「ありがとうございます。刑事さん」
光山は涙を拭いた後、安心したのかゆっくり眠りに入っていった。

「じゃ誠、俺は一旦職場に戻るが、光山の事頼むぞ」
哲夫は誠の肩をポンと叩いた。
「わかったよ哲ちゃん。でもこうなると家に帰れないだろうから、小夜子のこと見ていてあげてくれないか。あの子には本当に可愛そうな思いさせてばかりだが、俺は本当にダメな親父だよ」
誠は辛そうにつぶやいた。
「そんなことないさ、小夜ちゃんだってわかってるよ。後は任せとけ」
哲夫はそう言って東光大学病院を後にした。朝から取材に赴いていたが、光山の様子を見守っていた為、哲夫が愛車に乗り込んだのは、夕方の五時を過ぎていた。

一方圭一郎は、南原隆行の家に向かい、南原と彼が襲われた時にそばに居合わせた一郎と竜治に事情聴取していた。
「刑事さん、私は竜治と一郎がいなかったら自殺に見せかけて殺されるところでした」
南原が言った。
「なんですって！」
「奴らは私の飲んだお茶のティーバッグに睡眠薬を仕込んでいたんです。少し飲んだ時になんかおかしいと思ったのですぐ捨てたんですけど、どうやらそれに神経を麻痺させる薬も入っていたようで、一郎たちはそれにやられたようです」
「奴らが南原を襲ってきた時に、俺たちも必死で抵抗したんだけど、途中でしびれが凄く強くなって…。それでとっさに南原に警報スイッチを押すように言ったんだ」
一郎も言った。
「そういうことだったんですか、で、その問題のお茶は誰が持ってきたんでしょうか」
「今朝届いたものをうちの娘が入れてくれたんですよ。でも娘は何も知らないでこれを持ってきたんです。中に変な封書があったと気

味悪がっていましたが…」
　圭一郎が聞くと、南原はそう言って一枚の封書を見せた。
　その封筒には真紅のバラの絵が描かれているだけだったが、中をのぞいたところ1枚のカードが入っていた。
「ん？なんだろう…妙な絵柄だが、やけに気持ち悪いな」
「どうかしましたか？」
「お嬢さんは、もしかするとこのカードを気味悪がっていたかもしれませんよ」
　とカードを南原、そして一郎と竜治に見せた。その時、
「あ、これは…」
　と竜治が言いかけた。
「どうしたんだ」
「そのカードは、タロットカードの『死神』なんだ」
「なんだって！」
　竜治の言葉に南原が驚きの声を上げる。何者かが自分の命を狙ってきたことへの恐怖で、その体は一瞬すくんでしまった。
「となると、南原さん、あなたは狙われている危険性がありますよ。メディカのことで何か知っているとしたら、死神のカードは奴らの暗殺予告かもしれません。何か知っていたら話してくださいますか」
「そういえば刑事さん、俺の友人に聖ホーリー医大病院に勤めていた内科医がいたんです。彼もシグマプロジェクトに参加していたが、ある事故で被験者を死なせてしまったのがきっかけで、シグマプロジェクトの真の目的を調べていました。でもそれをマスコミに公表しようとした矢先に、彼は突然死んでしまったんですよ」
「なんですって！」
「その死因は心臓発作による病死と言うことで片付けられてしまったんだが、俺にはどうしてもぴんと来ないんです。あいつはスポーツマンだったしな。その友人の名前は秋月洸一郎と言うんですが」
「秋月さんから何か預かっている物はありませんか？あなたもゼトラマックスのことで調べていたことがあると、上司が友人から聞い

たのですが」
　圭一郎が再び聞くと、南原は、
「これです」
と自分の部屋から一枚の光ディスクを持ってきた。
「これには、シグマプロジェクトの全てが記録されています。秋月は、シグマプロジェクトのこれ以上の進行は、社会の為によくないと思っていたようです。その為に告発するチャンスをうかがっていた様に思います」
「シグマプロジェクトの進行は社会の為によくない？」
　南原から意外な言葉を聞き、圭一郎はびっくりした。
「シグマプロジェクトは、表向きには確かに遺伝子治療を応用した難病治療のための研究ということになっていますが、奴らがやろうとしているのは遺伝子治療の技術を悪用した研究なんです」
「いったいなんのために？」
「遺伝子治療の理論を悪用して、身体の細胞に変化を起こさせる薬を作ろうとしていたようです」
「身体の細胞に変化を起こす薬？」
「これは今まで話していませんでしたが、私はゼトラマックスに不審な点を抱き始めた時から、私の同僚の看護婦である川島理恵、それから南製薬の新薬開発研究員でゼトラマックスの開発にも関わっていた北原悠里さんの協力を得て、生化学の検査技師の天堂タケルとマウスにゼトラマックス投与する実験を一緒にやってきたんです。その結果確かに抗がん作用はあるのですが、身体の筋肉と神経に対して、異常な反応が起こるケースが多いことが分かったんです」
「どういうことですか」
「筋ジストロフィーとか筋無力症などの難病の様な症状が、急スピードで起こるんですよ」
「なんですって！」
　ゼトラマックスの恐ろしい真実を告げられ、圭一郎は愕然とした。
「秋月は言っていました。…聖ホーリー医大は表では確かに大きな

成果も上げているが、裏では恐ろしい事をやっているとね」
　南原はそう言って、
「聖ホーリー医大の学長の東郷裕一をご存知ですか？」
　と圭一郎に訊ねた。
「ああ…確か神経科と遺伝子治療の分野の権威でしたね」
「実は、東郷のその顔は表の顔で、裏ではいろいろな犯罪に手を染めているようで、いくつか犯罪組織ともつながっているんですよ。ゼトラマックスの副作用で亡くなった患者の遺体が消えているって、最近大騒ぎになっているでしょう？」
　南原はさらに話を続ける。
「刑事さん、その遺体の行き先は臓器マフィアや、犯罪組織なんですよ。クローンサイボーグやバイオサイボーグの技術を使って、人体改造の研究に使おうとしているらしいんです。それから、患者の遺体をクローン再生して、ゼトラマックスを発展させた更に恐ろしい薬を作る実験までやろうとしているんです」
「なんてことだ」
「とにかく、このまま奴らをのさばらせていたら大変な事になる。東郷を何とかして捕まえて下さい。真実を知らせようとして、志半ばで死んでいった秋月の為にも…お願いします」
　南原は必死になって訴えた。死んだ友の代わりに真実を伝えなければ。その口調には友の無念を晴らし、真実を知らせたい思いがにじみ出ていた。圭一郎は、
「わかりました、責任を持ってお預かりします」
　としっかりうなずいて光ディスクを受け取った。
　その時、銃声と共に二階から、
「きゃああ」
　と悲鳴が上がった。
　圭一郎と南原をガードしていた刑事，そして南原、一郎、竜治が二階へ向かうと、南原の娘・涼子が腹部を撃たれて倒れていた。
「涼子、どうした！しっかりしろ！」

「お父さんを狙ってきた殺し屋が…気をつけて」
南原の問いに、涼子は苦しそうに答えて力尽きた。
「涼子！」
悲痛な叫びを上げる南原。
「南原さん、落ち着いて。救急車を呼んで下さい！」
圭一郎はしっかりした口調で言った。そしてそばにいた刑事に、
「涼子さんを動かさないようにして応急手当しろ」
と言って、南原、一郎、竜治と急いで一階へ駆け下りた。
南原は、ホームセキュリティシステムのボードについている、一一九番通報のボタンをプッシュした。が、その時、背後から覆面をした男二人が、南原と圭一郎を襲ってきた。
「うっ」
二人がうめき声をあげると、
「お前たちは知りすぎていたようだな。死んでもらう！」
と大柄の男が南原の首筋にナイフをちらつかせてきた。しかしその時、圭一郎がとっさにもう一人の男を後ろ蹴りした。
「うわっ」
もう一人の男が股間をキックされ、もんどりうって倒れる。
圭一郎はすかさず男の肩口を狙って発砲した。しかし、
「南原は後でじっくり殺してやる」
と大柄の男が南原を抱え込んだ。
「そうはさせるか！」一
圭一郎は男のすねを狙って発砲したが、一発命中したものの、大柄の男は南原を抱えながら逃げて行ってしまった。そして一郎と竜治もいなくなってしまっていた。
「ちくしょう！」
もう一人の男に手錠をかけながら圭一郎は悔しがった。
その頃小夜子と哲夫は誠からの連絡を待っていた。
「黒木さん、お父さんから聞いたけど、殺し屋にゼトラマックスを

注射されかけたの？だめだよ、一人で立ち向かうなんてさぁ」
小夜子が心配そうに言った。
「ああ、危なかったけど、この通り大丈夫さ」
哲夫はそう言って胸をポンと叩いて見せた。
「でも殺し屋がゼトラマックスを持っていたなら、病院の薬剤師さんでメディカにつながっている人物がいるのは間違いないわね」
小夜子は確信したように言ったが、どことなく悲しげな目をしている。
「俺の幼なじみが話してくれたんだけど、あの薬は臨床試験で使っていた時から、副作用のことが引っかかっていたんだ。それでとっくに治療に使うのは中止したはずなのに、一人変な行動をしている奴がいるらしいんだ。それに彼は、当直の日会議でその事を話したんだけど、夜中に休憩の為に外へ出ようとして襲われて、抗がん剤をかけられたとか言っていたぞ」
哲夫は光山が伝えてきた事を小夜子に丁寧に説明した。
「えっ！？」
「俺の幼なじみはこうも言っていたんだ。あの薬は下手な使い方するととんでもない事になる。筋弛緩剤に似た作用が引き起こされて、そのために亡くなった人がたくさんいるんだとね。看護婦さんもびっくりしていたぞ。カンファレンスでも、ゼトラマックスの使用中止を決めたはずなのに、どうしてこんなことが…って」
「そんな…」
小夜子は今にも泣きそうになっていた。
「信じたくないよ、信じたくないよ。私、あの夜にダークパンサーに助けられた後、必死に治してくれて面倒見てくれたお医者さんと看護婦さんの姿を知ってる。人の命を助ける立場の人が裏でそんな事をしているなんて、私信じたくないよ。でももし本当にそういう悪い奴がいるのなら、私戦う！」
「落ち着くんだ、小夜ちゃん」
哲夫は優しく小夜子をなだめた。そして、

「でも可能性があるとすれば、ゼトラマックスを南製薬がメディカに売りつけてるかもしれないな。そしてそれをメディカにつながっている薬剤師が、注射に使っている可能性があるかもしれない」
と重い口調でつぶやくと、誠の携帯電話を呼び出した。
「もしもし」
三回呼び出し音が鳴った後、誠の声が入ってきた。
「誠か？俺だ、小夜ちゃんと今さっきのことを話していたんだが、小夜ちゃん、ショックで泣いていたぞ。人の命を助ける立場の人が裏でそんな事をしているなんて、私信じたくないよって。でももし本当にそういう悪い奴がいるのなら、自分も戦うとまで言ってた」
哲夫は辛そうに言った。
「本当か。あの子は本当に、死にかけたところを皆に助けてもらったしな。それを思うと、そういう話は怒りを通り越して悲しいんだろうな」
誠も重い口調で答えた。言葉の端々に怒りと悲しみがにじみ出ている。
「これはあくまで俺の推理だけど、ゼトラマックスを南製薬がメディカに売りつけているかもしれないな。そしてそれをメディカとつながっている薬剤師が、密かに注射に使っている可能性があるかもしれない」
哲夫は小夜子に話した事をそのまま誠に伝えてから、
「もう一度、南製薬に当たってみたほうがいいぜ。お前の頼りになる部下に頼んでみてはどうかな」
と言った。誠は、
「よし、哲ちゃんの推理を信じてみようか。また連絡するよ」
と言って電話を切った。

それから十分過ぎた頃、誠は、東光大学病院の常駐のガードマンと広域捜査課のメンバーと共に、病院内部のパトロールをしていた。
「光山さん、大丈夫かしら」

ありさが心配そうに言った。
「看護婦さんが付きっ切りでいるらしいが…念の為様子を見てきてくれないか」
「はい」
ありさは光山のいる病室へと向かい、誠たちは薬剤室へと向かった。ところが薬剤室の電気は消え、辺りは一面の闇になっていた。
「おかしいな、一人ぐらいは当直の先生がいるはずなのに」
誠が不審に思ってつぶやいた次の瞬間だった。
「ぐあああっ」
ガードマンの悲鳴が闇の中にこだました。
「どうした」
誠がガードマンの元へ走ろうとしたその時、黒い影が誠に襲い掛かった。殴られた瞬間にぼんやりとした光の中で、黒い影が注射器を手にしているのが、誠にはすぐにわかった。
「お前は一体何をしている」
誠は男に問いただす。
「俺は自分の上司を始末する。それだけだ」
男は低く冷たい声で言い放つ。
「人の命を助ける立場だと言う事を忘れているのか、お前は！」
「ふっ、人の命か。笑わせるな。どんなに長生きしようが人はいつか必ず死ぬ。お前の命もこの場で終わらせてやろうか。フフフッ」
黒い影はそういうやいなや、誠の首をヘッドロックで絞めてきた。
「うっ！…許さんぞ！　」
誠は悲鳴を上げながらも必死に抵抗した。そして隙を見て黒い影の足を踏みつけると覆面と上着を剥ぎ取った。
「おのれ！」
黒い影は血相を変えて逃げ出した。
「待て！」
誠は全力疾走で後を追う。が、しばらくいったところで男はエレベータに乗り込んでしまった。

「くそっ！重要参考人になりそうな奴だったのに！」
誠は悔しそうにゆっくりと息を整えながら、一階に戻っていった。
すると、
「警部！光山さんは無事です。それより大変な事になりました。津上さんから連絡が入ってます。すぐ来て下さい！」
とありさが駆け込んできた。
「よし！」
誠は玄関を飛び出し、自分の車の無線を取ると、
「津上か、どうした」
と呼びかけた。すると、
「南原隆行さんと警部のお兄さんとお友達が捕まったんです。おそらくメディカですよ。今一緒にいたメンバーと奴らの車を追跡していますが、聖ホーリー医大病院方面へ向かうようです。警部、応援お願いします」
と圭一郎が答えてきた。
「よしわかった。すぐ行く」
誠はそう言うとありさと車に乗り込んだ。その時、
「警部、男をガードマンの一人が捕まえたそうです。俺たちで身柄は確保します。それから南製薬の関係者に事情聴取しましたが、メディカ…というより聖ホーリー医大病院にゼトラマックスを買いつけさせられてたそうです」
と誠の部下の一人、新城弘一が報告してきた。
「よしわかった。俺は聖ホーリー医大病院に向かう。そっちを頼むぞ、弘一」
誠はしっかりとした口調で言った。

決意

その頃、哲夫は小夜子を寝かせ、誠からの連絡を待っていた。
「何事もなければいいが…」
哲夫がふとつぶやいたその時、、
「黒木さん！」
と窓ガラスが割られ、二階の自室で悲鳴を上げる小夜子の声が響いた。
「小夜ちゃん！」
哲夫はとっさにシャドーアクセプターのスイッチを押してダークパンサーに変身すると、すぐさま二階に駆け上がり、小夜子の部屋に走った。すると、
「このやろう！」
と小夜子がベッドのはしごを使って、男たちに殴りかかっていた。
「今いくぞ！」
ダークパンサーはそう言うと、男たちを次々とキックで倒していった。
小夜子はその間に自分の机の椅子を出して、
「えーい！」
と力いっぱい男たちのほうへ投げつけた。とっさに出た怪力のせいか、小夜子の投げた椅子は、男たちの一人の顔面に強烈にヒットした。
「野郎ッ、女だてらに俺たちが倒せるものか！」
椅子をぶつけられた男がナイフで小夜子の顔を切りつけようとした。小夜子はすぐに廊下に出ると、男の横に回りこみ、回転投げで男を階段から投げ落とした。
ダークパンサーも残った男たちに回し蹴りをヒットさせる。
しかしその時、かおりの部屋に隠れていた三人組の別の男たちが小夜子に襲いかかってきた。投げ技をかけようとした小夜子は、背

後から別の男に首を絞められてしまった。
「うっ、苦しい！」
小夜子がうめき声をあげる。
「許さんぞ」
ダークパンサーはブーメランを手に男たちに切りかかった。小夜子を何とか守らなければ。ダークパンサーはその思いでブーメランを剣のように振るう。
「うわっ！」
男たちの肩口から血が流れていく。が、次の瞬間、
「ダークパンサー、死ねッ！」
とブーメランで切りつけられた男たちの中の一人が、ダークパンサーを連続キックで背後から襲ってきた。
「うああっ！」
もんどりうって倒れこんだダークパンサーは、別の男にもキックを決められ、吹っ飛ばされてしまった。
「ダークパンサー！」
小夜子が叫びながら、男にキックを決める。
「許せない、かおりを奴らに殺させることだけはさせない！ダークパンサーも、皆も！」
小夜子は最後の力を振り絞って、ダークパンサーを襲った男を、再び回転投げで階段から投げ落とした。そして、何とか立ち上がったダークパンサーも男たちを再びなぎ倒した。
「ちくしょう、覚えていやがれ！」
男たちは命からがら逃げていった。
その時、一階の電話が鳴った。小夜子は急いでかけ降りると、
「もしもし、黒田です」
と言った。
「小夜子か…お父さんだが、南原さんと兄さんと竜治が捕まった！今聖ホーリー医大病院に向かっている」
「えっ！？じゃあ奴らの車か何かを追っているのね」

誠が今の様子を知らせてきたのが、すぐ小夜子にはわかった。
「その通りだ。日比谷公園の事件の事もお父さんの部下が調べてくれているが、今までにわかったこと教えるぞ」
誠はそう言ってから話を続けた。
「二人は中学時代からの親友だったらしいが、ゼトラマックスの秘密を何かのきっかけでたまたま知って、真相を二人で探って告発しようとしていたようなんだ。ただ開発に関わった人は社内で嫌がらせを受けたり、白石社長や直属の上司からセクハラを受けたりしていた挙句、別の部署に左遷されちゃったらしいんだよ。関係者の人が話してくれた」
「ひどいよそれ！そんなことが許されるなんてどうかしてるよ」
「それから、哲ちゃんの推理通り、南製薬は聖ホーリー医大…メディカの本元に、ゼトラマックスを売りつけていたよ。…そっちはどうだ？　」
「私が寝ていた時にメディカの連中が！ダークパンサーがまた助けてくれたけど、彼がけがしちゃった」
「なんだって！そういえば哲ちゃんはどうした」
「黒木さんはずっと起きてくれているみたいだけど、どこにいるかわからない」
誠の質問に小夜子は更に半べそになった。その時、
「ダークパンサーの事を見ていてやれ」
と誠は優しく言った。
「えっ？」
「お前は何度も彼に助けられているだろう。彼が傷ついた時ぐらいそばにいてやれ」
面食らう小夜子に誠はさりげなく言った。
「哲ちゃんに言ってくれ。ゼトラマックスは筋肉に異常を起こす作用を持つ毒薬だって、俺の部下が知らせてきたと…じゃあな」
「わかったわ、気をつけてね」
小夜子は電話を切ると、右手の拳に力をこめた。その拳にはそん

な薬をたくさんの人を欺いて売りつける悪党は許せないと言う思いが一杯に込められていた。

小夜子が慌てて二階に戻ると、

「ううっ」

とうめき声をあげながら、哲夫が廊下でうずくまっていた。

「黒木さん！…大丈夫？　早くベッドで横になったほうがいいわ」

小夜子は哲夫のそばへかけ寄ると、自分の部屋に哲夫を連れて行き、部屋を片付けつつ哲夫に横になるように促した。哲夫は横になると、

「今度はダークパンサーが助けられちゃったな」

と苦笑いした。

「今の電話はお父さんからか」

「ええ、聖ホーリー医大に向かっているって。…こうなったら私も戦う。何も知らないで、ゼトラマックスの副作用で殺された人たちのためにも！」

「小夜ちゃん…、戦うのはダークパンサーだけでいい。俺は小さい頃からよく知っている君をこれ以上危険な目に遭わせたくない」

「待って！お父さんが教えてくれたの。黒木さんにも伝えて欲しいって言ってね。ゼトラマックスは、筋肉に異常な作用を起こす作用を持つ毒薬だったって！」

「なんだって！やはりそうだったのか」

「それだけじゃないわ。お父さんの仲間が調べてくれている日比谷公園の事件だけど、被害者の人は中学時代からの親友だったらしいけど、ゼトラマックスの秘密を何かのきっかけでたまたま知って、真相を二人で探って告発しようとしていたらしいの。ただ開発に関わった人は社内で嫌がらせを受けたり、白石社長や直属の上司からセクハラを受けたりしていた挙句、別の部署に左遷されちゃったらしいってお父さんが言ってたわ」

小夜子は冷静に話そうとしたが、怒りが押さえられなくなってい

た。
「そうか、そういうことだったのか。…奴らが君たち家族を狙ったのは、お父さんが刑事である事を知っている者…たぶん森川光三郎がメディカの黒幕にお父さんを殺すように依頼したんだと思う。伯父さんが狙われたのもそれと関係あるに違いない。今までの事件もね」
「黒木さん、邪魔者は消せと言うことなの？じゃあ、私が殺されかかったり、かおりが誘拐されたりしたのも森川がその黒幕に頼んだことかも知れないのね」
「おそらくな…あの夜は皆揃っていた時に襲われただろう？」
「冗談じゃないわ！森川の悪党ぶりは知ってたけど、スキャンダルから自分の身を守るために人を殺そうとするなんて」
小夜子はまた怒りを爆発させた。そしてマシンガンの様に思いをぶつけた。
「なんでそんな悪党がもっとらしい顔して国会議員をやってるのよ！どうしてお父さんたちや東京地検は、森川を逮捕できなかったの？」
「落ち着くんだ、小夜ちゃん」
「黒木さん、何の関係もないのにかおりは誘拐されちゃったのよ。その悪党に！私にダークパンサーみたいな力があればいいのに。皆を助けることが出来るのに！お父さんたちが森川たちを逮捕できないなら、私と黒木さんで懲らしめればいいじゃないのよ」
と小夜子は言った。話していくうちにその声は嗚咽交じりになっていた。そして小夜子は泣きながら、
「皆を…かおりを助けたい！森川たちを懲らしめてやりたい！でも…どうしたらいいのよ！」
と続けた。すると、
「小夜ちゃん…わかったよ。君の気持ちは。でも本気でメディカのような恐ろしい奴らと戦うつもりなのか。命の保障はないんだぞ。本当にそれを覚悟できるのか」

哲夫は静かに言った。
「君にもしものことがあったら、本当に辛い思いをするのは、お父さんとかおりちゃんなんだぞ」
「黒木さん、確かに言う通りだわ。でもメディカの奴らと森川たちのあくどい陰謀の影で泣いている人もいるのよ。ゼトラマックスを使ったために死んだ人だっているんだよ。それなのに森川と白石は、メディカと組んで更に恐ろしい事をやろうとしている…。こんな不条理が許されてたまるもんですか！」
「そうか…」
「原因もわからない病気に苦しみながらも、健気に生きている子供たちがいる陰で、人の命を守る責任のある製薬会社と政治家がつるんで悪い事をしてるなんて…私、絶対に許せない！」
「君の気持ちはわかるが、俺は君を巻き込みたくない。奴らは本当に恐ろしい敵なんだぞ。戦うことがどんなに怖くて恐ろしいか君はわかっていない！お父さんは命がけで町の平和を守っている。それは本当に厳しくて大変なことなんだぞ」
「それを覚悟で言ってるのよ、私は。お願い！奴らと戦える力を」
小夜子は哲夫に訴えた。父が摘発出来ないだけに危険な組織なのはわかっている。でも人の命を救うためと見せかけて、陰で悪事に関わっている者を警察が逮捕できない現実を、黙って見過ごすことは出来ない。小夜子はそう思っていた。
「どうしてお父さんたちが森川を逮捕できないかはわからないけど、今は会期中ではないでしょ？それにそんな政治家に日本を任せちゃいけないって、黒木さんも言ってたでしょ」
「小夜ちゃん、君の言うとおりだ。でもそんな巨悪と君は本気で戦うつもりなのか。君にはこれから輝く未来があるのに。君にはそんなことはして欲しくない」
哲夫はそう言うとゆっくり起き上がり、
「ダークパンサーを信じろ。奴らの陰謀は絶対つぶすから」
と言って静かに歩き始めたが、メディカの殺し屋と思われる男た

ちにキックされた背中の痛みで、うっと一瞬顔を歪めた。
「その身体でそのまま戦うなんてムチャよ！」
小夜子は必死に止めようとするが、
「君たちを死なせたくないんだ、俺は」
と哲夫は傷だらけの体で、顔をゆがめながら歩いていた。
「だめよ黒木さん！そんな体で戦ったら死んでしまうわ！私も行かせて！一緒に戦うから。お願い！」
小夜子が泣きそうになりながら言うと、
「だめだ、断る！小夜ちゃん、戦う事の意味を君は本当にはわかっていない！お遊びなんかじゃないんだぞ」
とものすごい勢いで怒った。
「どうして…どうしてわかってくれないの！」
怒りといらだちをぶちまける小夜子。しかし、
「君には俺がなぜ戦っているのかわかるまい、いや、わからないほうがいいだろう。一人で行かせてくれ」
と哲夫は小夜子を振り切って、黒のゼファーで走り去ってしまった。
「どうしてなの、黒木さん」
小夜子は思わずポロポロ涙ぐんだ。しかしすぐに涙をぬぐうと、意を決したように外に出て星空をじっと見つめた。
「黒木さんがダークパンサーなのかなんてどうでもいいわ！だけど、ダークパンサーにも黒木さんにも、皆にも死んで欲しくない！絶対メディカは許さない。奴らに皆を殺させはしないわ！」
小夜子はそうつぶやくと、自分の白いバンディットに乗り込み、スロットルを全開にして、哲夫の後を追って疾走していった。
ダークパンサーが黒木さんだろうとそうでなかろうとかまわない。だけどこんな恐ろしい陰謀にかおりが巻き込まれた。そのために死んだ人だってたくさんいる。表向きには人の役に立つ研究のように見せて、裏でこんなひどい事をしている大人がいるなんて絶対に許せない！お父さんたちが頑張ってもダメなら私とダークパンサーが

戦うしかない。絶対こんな陰謀は阻止してやるんだから。小夜子は胸の中で炎のように燃える怒りをエンジンに伝えるかの如く、アクセルを解き放った。

その頃、聖ホーリー医大病院の一室に放り込まれた竜治と一郎は、かおりと共にベッドにくくりつけられていた。

「ちくしょう！こんな事になるなんて思わなかったぜ」

「奴らの狙いは俺と誠だったんだ。竜治じゃないぜ」

悔しがる竜治を一郎が慰める。

「おじさん、でも私、ずっと一人で暗いところに閉じ込められていたのよ。それで薬の実験で殺されるなんてあんまりだわ。早くお姉ちゃんに会いたい！どうしたらいいのよ！」

「なんだって！本当か、かおりちゃん」

「お父さんに無事なの知らせようと思って、見張りがいないところを見計らって電話のあるところに行ったら、偶然森川たちの話立ち聞きしちゃったの。奴らはゼトラマックスより恐ろしい薬を、厚生省に圧力をかけて認可させようとしているの。その為に臨床試験データを集めているみたいなんだけど」

「ふざけたことしやがって！」

一郎が叫んだ。すると、

「どうあがいてもムダだ。ゼトラマックスとニトロを打たれたら一巻の終わりだからな。フフフッ」

とかおりを連れてきた男が不気味に笑った。そして注射器をかおりの顔のほうへとちらつかせた。

「やめてーっ！」

かおりが悲鳴をあげる。

「この三人さえいなくなれば、後は警察とダークパンサーだけだ」

「この事件が闇に葬られれば、警察も動きようがあるまい。一気に権威は失墜するはず」

森川も薄笑いを浮かべて言う。

「川島理恵と北原悠里、あの二人も愚か者めが。ゼトラマックスの秘密を街頭で告発しようとしていたらしいがな。東郷の配下が始末してくれたからいいようなものの、あれがもっと広がったら大変な事になっていた。だが後はゼトラマックスの秘密を知っているもう一人の男・南原をじっくり殺せばいい。そうなれば真相は闇の中だ」
白石が確信したように言うと、三人は、
「ハハハハハハ…」
と大きく高笑いした。
「ふざけやがって！」
竜治が怒りを必死に押し殺す。その時、
「小娘から始末してやれ、ダーティー。じわじわ苦しめるほうが面白いだろう」
と東郷がかおりを連れてきた男・ダーティーに命じた。
「やめて！誰か、誰か助けてー！」
かおりは泣きながら絶叫した。
「いやぁぁぁっ！」
だがその時、その悲鳴が聞こえたかのように、ドアが破れガラスが割れる音が響いた瞬間、
「そうはさせないぞ、東郷、森川、白石！お前の部下の一人・シルバーホークこと水沢は我々が逮捕したぞ！」
「俺たち警察をなめるんじゃないぜ」
と誠と圭一郎がそこへ駆け込んできた。
「なにっ！」
東郷が怒鳴り、殺し屋たちを呼びつける。
「どうして私のことが警察に…やれ！」
「警部、ここは俺に任せて、お兄さんたちを」
圭一郎は誠をかばいながら、殺し屋たちに独り立ち向かっていった。
殺し屋たちと圭一郎の銃声が錯綜する中、誠は銃弾をかいくぐりながらかおり、一郎、竜治を助け出した。

「皆大丈夫か」
「お父さん！！」
父の声を聞いたその瞬間、かおりはドッと声を上げ泣き崩れた。
「怖かった…お父さん。死ぬかと思ったよ」
「俺たちの前では、こんなにひどく泣かなかったけど、かおりちゃんの身体は傷だらけなんだ。奴らにされたリンチのせいで…許せないぜ」
「でもかおりちゃんはお前が来てくれるのを信じて頑張っていたんだ」
一郎と竜治が言った。
「かおり、よく我慢した。えらいぞ。お前にひどい事をした奴らはお父さんたちが捕まえるから安心しろ」
誠はそう言ってかおりをしっかり抱きしめてやった。
そして、
「兄さん、竜治、かおりを頼む」
と言って圭一郎の元へ走っていった。
「行こう、かおりちゃん。おぶってあげるからしっかりつかまって！」
一郎はそう言うと、かおりを背中におぶって立ち上がった。そして、
「竜治、行くぞ！」
と走り出した。
だが、東郷の差し向けた別の殺し屋たちが一郎たちに襲い掛かってきた。
「なにっ！」
一郎が殺し屋たちをかわしながら一瞬戸惑いを見せた。竜治は、
「よし、俺に任せろ。俺の方に奴らの注意をひきつけておくから、その間にかおりちゃんを安全な場所に連れて行くんだ」
と一郎の耳元でささやいた。
「わかった」

一郎はうなずいて、再びかおりを背中に背負ったまま走り出した。
「やい、悪党！やれるもんならやってみろ。俺が相手になってやるぜ」
竜治はそう言って殺し屋たちを自分のほうへ引き付けた。
「野郎ッ！やっちまえ！」
殺し屋たちが竜治めがけて飛びかかってきた。竜治はヘルメットで殺し屋にパンチした後、
「お前らみたいな卑怯者どもを黙って見過ごせないんだよ。俺は！」
と言い放ち、殺し屋たちの攻撃にパンチとキックで応戦した。しかし、殺し屋たちはナイフを手にしており、とどめを刺すところまでには中々いかない。
「しつこい奴らだぜ、まったく」
竜治は歯がゆい気持ちになっていた。
だがその時、再び黒いブーメランが宙を舞った！そして殺し屋の一人が肩を切りつけられて倒れこんだ。
「うわっ！」
他の殺し屋たちも腕を切りつけられ悲鳴を上げる。
「あ、あれは！」
「なにっ！」
殺し屋たちが同時に声をあげた先にはダークパンサーの姿があった。
「素手で戦おうなんてムチャだぜ。俺も加勢するからな！」
ダークパンサーが言った。
「おう！」
竜治がうなずいた。
「野郎ッ、またも邪魔を…」
「生かして返すな！ダークパンサーもろとも殺せ！」
殺し屋の一人と東郷が怒鳴る。
「そうはいくか！ワルサースナイパー！」
ダークパンサーはワルサースナイパーを引き抜くと、殺し屋たち

に向けアタックビームを次々と発射していった。
「うっ！」
「ぐああっ」
「うあっ」
殺し屋たちがうめき声をあげて次々と倒れていく。
ダークパンサーは、逃げる殺し屋たちを追って病院内を駆け抜け、殺し屋たちを次々と倒していき正面玄関を目指す。だがその時、
「うあっ！」
シャドーテクターに凄まじい電撃を受けてしまい、悲鳴をあげるダークパンサー。
「ハハハハハッ」
東郷が高笑いを上げる。
「電磁バリアの網に引っかかりおったな。」
「なにっ！？」
竜治が言った。
「そこは一万ボルトの電磁波が流れている空間だ、ダークパンサーも思う様に動けまい」
東郷が冷ややかに言う。
「ちっくしょう…」
ダークパンサーは，苦しそうな声を上げながらも必死に立ち上がろうとする。戦士としての彼の思いが苦痛を跳ね返す力になって溢れ出す。
「大丈夫か！」
竜治が駆け寄ろうとしたその時、
「そこから離れろ、危ないぞ！俺はまだ大丈夫だ！」
とダークパンサーが絶叫した。
竜治が振り向くとダーティーがロケットランチャーを二人のいる方へ向けていた。
「なにっ！」
竜治が驚きの表情を見せたその時、

「死ねッ！」
ダーティーがロケットランチャーの引き金を引いた。しかしその時、
「危ない、逃げろ！」
とっさにダークパンサーは竜治の身体を安全な場所へ投げ飛ばした。その瞬間、強力な火炎弾が立ち上がろうとしたダークパンサーに襲い掛かった。
「うあああっ」
強力な爆風に吹き飛ばされたダークパンサーの身体が、受付の部屋のドアを破り壁に叩きつけられた。さらにそれを待ち構えていたように、別の殺し屋たちがダークパンサーに襲いかかってきた。
「おのれ、ちくしょう…うっ！」
必死に抵抗するダークパンサーだが、ダメージのために思うように立てなくなってしまっていた。度重なった攻撃のダメージで、シャドーテクターをつけた哲夫は満身創痍の状態だったのだ。
さらに殺し屋に痛めつけられるダークパンサー。
「とどめだ…これで真相は闇の中も同然だ」
様子を観に来たダーティーがそう言ってほくそえんだ後、
「やれ！」
と言った。
そして、殺し屋の一人がシャドーテクターを破壊しようとレーザーブレードを抜き、胸元を切りつけようとブレードを振り上げた。
「ううっ」
うめき声をあげるダークパンサー。
「パンサー！」
竜治が絶叫しながら走ってきた。そしてレーザーブレードを持った殺し屋めがけてジャンプし、外へ飛び出した次の瞬間…、一瞬の沈黙を破って、疾風の如く凄まじいバイクの爆音がとどろき、激しく入り口のガラスを突き破った。
「なにっ！」

ダーティーが驚いて振り向くと、白いバンディットにまたがった小夜子が猛スピードで疾走してきた。赤のヘルメットが車体によく映えている。小夜子はフルスピードで正面玄関にオートバイごと突っ込んだのだ。
「何者だ！」
殺し屋の一人が怒鳴る。
「悪党連中！これ以上の勝手はさせないわ！」
小夜子はバンディットを止めて言った。
「やっちまえ！」
ダーティーが怒鳴り、殺し屋たちが小夜子に向けて飛びかかってきた。
「デカの娘をなめるんじゃないよ！」
小夜子はべらんめえ調でタンカを切ると、一気にスロットルを全開にして殺し屋たちに体当たりした。そしてオートバイから降りると、向かってきた殺し屋を鮮やかに投げ飛ばしていった。
「うわっ」
「ぎゃっ」
「ぐあっ」
殺し屋たちが悲鳴を上げその場に倒れていく。
「なにをしているんだ。やめろ、ムチャするな！」
ぐったりした姿でダークパンサーが必死に叫んだ。
「お願い！…ダークパンサー、死なないで！　」
小夜子は悲しみの中で絶叫した。父と同じ位尊敬し、大切にしている人を失いたくない。その思いで小夜子は、必死に力を振り絞って殺し屋たちに立ち向かった。そしてその身体にはやがて服を切り裂かれたために出来た傷跡が痛々しく刻まれていった。その時、
「飛んで火に入るなんとやら…二人揃って地獄に落ちろ！」
とダーティーが不気味に冷ややかな表情で言い放ち、ダイナマイトを小夜子とダークパンサーに向けた。
「そうはいかないわ！」

小夜子は大きくジャンプして壁で反動をつけると、素早くダーティーの背中にキックした。
「ぐあっ」
よろめくダーティー。
「あんたたちの思う通りになんかさせはしないわ！」
小夜子は傷ついたダークパンサーを守ろうと必死に走った。しかし、
「危ないッ！」
小夜子をかばおうと残っている力を必死に振り絞ったダークパンサーが、小夜子の方へダイビングしたその瞬間…、
時限爆弾が建物を揺るがす大音響と共に爆発し、二人の身体が宙を舞い床にたたきつけられた。そして同時に周りを取り囲む炎。だが一方のダーティーも悶え苦しんでいた
「うああっ！」
なんと小夜子を守るためにダイビングした時、ダークパンサーは手首から強力な電磁針をダーティーの腹部に向けて発射していたのだ。ダーティーはうめき声をあげながら殺し屋たちと一時退却していった。

それからしばらく時間が過ぎた頃…
「小夜ちゃん…小夜ちゃん…しっかりしろ！」
哲夫が必死に叫ぶ。爆発のダメージで戦闘不能になり、ダークパンサーから元の姿に戻ってしまっていたのだ。
小夜子は傷だらけになっていた。そして哲夫の声に答える様子もなかった。
「どうしてこんな傷を負ってまで、小夜ちゃんは俺を…」
傷だらけになって倒れている小夜子を見つめながら、哲夫は苦悩した。
「奴らがあれだけ恐ろしい敵だと言うのに、小夜ちゃんはほとんどといっていいほどひるまなかった。おそらく俺がここに向かってす

ぐに、急いでここに乗り込んできたんだろうな。俺は命がけで戦ってきたし、死線をさまよった事もあるから、闇の仕置人というものの大変さと戦いの苦しみを痛いほど知っている。だから俺は、小夜ちゃんにはこんな事はして欲しくなかった。だが…小夜ちゃんは身体を張って俺を助けようとしたゆえに、こんなひどい傷を負ってしまったんだ」

哲夫自身も身体のいたるところに傷を負っていた為、デニムのシャツとジーパンを血でにじませていたが、小夜子の身体には、ダークパンサーを守ろうとして爆発を受けて出来た傷跡が痛々しく刻まれていた。小夜子はフルフェイスのヘルメットをかぶっていたので、顔にこそ傷はつかなかったが、爆発で受けたダメージでヘルメットは傷だらけになってしまい、服もズタズタになり、そこからかなり血が出てしまっていた。

哲夫は小夜子の頭を動かさないように注意しながら、ウエストポーチに忍ばせておいた救急セットで小夜子の傷の手当てをしてやった。

「小夜ちゃん…こんなにひどい傷を負うのを覚悟で、君はお父さんたちや俺に協力しようとしていたのか。俺を助けようとしてこんなけがをしてしまった今、小夜ちゃんに俺が出来ることはなんだろう…」

小夜子の傷の手当てをしながら、哲夫はしばらくの間必死に考え込んでいた。

その時、

「ううっ…」

と小夜子が、ヘルメットの中で目を開けた。

「気がついたか…しっかりしろ、小夜ちゃん！」、

「黒木さん、ごめんなさい…。でも皆を助けたかったから来てしまったの。かおりはどこにいるの？会ったの？」

「ムチャするなって言ったのに、どうしてここに来たんだ君は！かおりちゃんなら一郎と竜治と一緒だったが…」

「皆を助けたいからに決まっているでしょ！だからダークパンサーをかばったんだから。死んで欲しくないもん！ものすごい音がしたから夢中で正面玄関に回ったら、ダークパンサーがメタメタにされていて、見ていられなかったんだからね！」
小夜子はむきになって哲夫に言った。
「黒木さんがダークパンサーなのかはどうでもいいことだけど、一人だけで戦おうなんてそれもムチャよ！私だって命をかける覚悟でいるから、ダークパンサーを助けようとしたんだから」
「もっと危険な目に遭うかも知れないぞ。それでも大丈夫なのか」
「そんなの覚悟しているわ、本当に悪い奴らと戦うためならば」
「こんなケガをしても殺し屋に立ち向かうつもりだなんて…それじゃ命がいくらあっても足りないぞ」
哲夫はそう言って、デニムシャツのポケットから黒光りするものを取り出し、それを小夜子の左腕につけてやった。デニムシャツの袖口から哲夫のシャドーアクセプターがほんの少し光を見せる。
「えっ！まさか…」
「本当は君にはこれを渡したくなかった。命の保障のない戦いに君を巻き込みたくなかった。でも君には負けたよ、小夜ちゃん。そこまで言うなら君の言葉を信じようか、俺も」
哲夫は優しく言った。そこまでして戦う決意があるのならば、小夜ちゃんの言葉を信じてみよう…小夜子の思いに触れ、哲夫は小夜子を信じてみようという気持ちになり始めていた。
「ひょっとしたら君は、俺がダークパンサーである事を見破っていたのかもしれないが、そんなことはもういいさ。ただしこれは、俺と小夜ちゃんだけの秘密だからな。このシャドーアクセプターのことも…約束だぞ」
「そうだったの。やっぱり…。でも私、だからこそ黒木さんを助けたかったの。ごめんなさい」
小夜子はそう言って、涙を拭いてうなずいた。その時、
「小夜子！大丈夫か」

と暁が駆け込んできた。
「君は…暁君じゃないか！」
「暁、どうしてここに！？」
哲夫と小夜子が驚きの声を上げた。
「何か胸騒ぎがして、もしかしたら親父さんの追っている事件の絡みでここにいるかなと思ったんだ。でもそんなひどいけがしてまで戦おうだなんて。ムチャだぜ小夜子。あ、黒木さん…ごめんなさい。俺、今話してたの聞いてました」
暁は小夜子に怒鳴った後、申し訳なさそうに哲夫に謝った。
「暁君、俺を助けてくれたのは小夜ちゃんだ。そのためにけがをしたんだ」
「えっ！ムチャしやがって…小夜子、そこまでしてお前は何を守りたいんだよ！」
「皆の笑顔。今はそれしか言えないわ」
小夜子は言葉を選ぶように言った.
「母さんはその志半ばで地雷に体をバラバラにされて死んでしまった…。子供達の笑顔のためにとボランティアでカンボジアに行っていた時だった。今もこの町のどこかで悪い奴の為に泣いている人がいる…。皆の笑顔を守る為にお父さんだって頑張ってる。だから刑事の娘としてお父さんのために力になりたい。大好きなお父さんに殉職して欲しくないから。黒木さんはお父さんの友だちでもあるの。なぜ戦ってるかはわからないけど、きっと気持ちは私といっしょだと思う」
「小夜子、そこまで言うなら俺もお前を信じるぜ。ただ、黒木さんから悪い奴らと戦う力を託されたなら、戦いの中で死ぬなよ」
暁はそう言って小夜子を抱きしめると、
「俺は…俺は…小夜子のことが好きだから。これからもずっと！」
というのがやっとだった。
「わかった、絶対帰ってくるから。待っててて。暁」
小夜子はしっかりとした口調で言った。

「黒木さん、小夜子の事頼みます。おてんば野郎だけど、心はとても優しいのは俺もよく知ってますから」
暁はそう言って、めちゃくちゃになった正面玄関を後にした。その時、
「お姉ちゃん、助けて！」
と哲夫のシャドーアクセプターを通して、かおりの悲鳴が響いた。
「かおり！…きっとまた、奴らに皆捕まっちゃったんだわ」
小夜子は傷の痛みをこらえてゆっくり立ち上がった。すると、哲夫がシャツの袖をまくって歩きだそうとしていた。
「まさか…そんな身体で戦うなんてムチャよ。黒木さん」
小夜子が止めようとすると、哲夫は、
「こんなケガ、なんてことはないさ。俺も行くぞ」
と言った。そして、
「シャドースパーク！」
と叫んで右腕を大きく回した後両腕をクロスさせ、シャドーアクセプターの黒のボタンを押した。
するとシャドーアクセプターから黄色い光が放射され、シャドーアクセプターから光が溢れ出していった。さらにその光が哲夫の身体を凄まじいスピードでかけぬけていき、哲夫の体を繭の様に包むと、ダークパンサーの黒いシャドーテクターのパーツが足から上へと順に装着されていった。そして、哲夫の姿がダークパンサーに変わると、黄色い光は再びその体をかけぬけ、火花となって散っていった。
「かおりちゃんたちがどこにいるかは、大体の見当はついている。ここは俺に任せとけ！」
哲夫はしっかりとした口調で言った。
「黒木さん、そんなに一人で頑張らないで。私も一緒に行く。皆の笑顔を守りたいから」
小夜子はそう言うと、
「シャドースパーク！」

と叫び、シャドーアクセプターの紫色のボタンを押した。
　すると、シャドーアクセプターから紫色の光が放たれ、小夜子の身体を包み込んだかと思うと、小夜子の体を強烈な輝きを持つ虹色の光がかけめぐっていった。そしてそれと共に小夜子の身体をシャドーテクターのパーツが、腕、脚、腰、胸、頭部の順に装着されていくと、紫色の光は小夜子の身体から弾けるようにして消えていき、小夜子の姿は、ジャガーを模した頭部を持つ紫色のシャドーテクターをつけた姿に変わっていた。
「これは…これが私のもう一つの姿なのね」
　小夜子はガラス越しに映った自分の姿に一瞬戸惑った。自分の今ひとつの姿がこのようになるとは、全く思っていなかったのだから。その時ダークパンサーが、変身した小夜子に歩み寄ってきた。
「小夜ちゃん、約束できるか？決して中途半端に関わらない事を」
「黒木さん、これは皆の笑顔を守る為に私が選んだ道だから、私を信じて下さい」
「わかった」
　小夜子の言葉に哲夫がうなずき、二人は走り出した。

末路

その頃誠と圭一郎は、殺し屋たちを必死に追跡していた。銃声が激しくぶつかり合っていく中、二人は殺し屋たちの攻撃をかわしながら応戦を続けていたが、体力の消耗を防ぐために、しばらく息を潜めて殺し屋たちの様子をうかがっていた。

「警部、東郷はかなり訓練をしている殺し屋を送り込んでいるようですね」

圭一郎がささやくような声で言う。

「だけど俺たちは負けるわけにはいかない…これは警察とマスコミへの奴らへの挑戦状なんだから」

誠が言う。

「そろそろいくか」

「ええ」

誠と圭一郎はうなずきあうと、殺し屋たちの注意を引くために、拳銃を天井に向けてわざと発砲した。

「なにっ！」

遠くから殺し屋が怒鳴る声がした。

「いくぞ！」

誠は弾倉を一杯にすると、殺し屋たちに向かって体当たりするようにして走り出した。虚を突かれた殺し屋たちを圭一郎が次々となぎ倒していく。二人は殺し屋たちの肩口を狙って発砲しながら、中央手術室へ入っていった。

「何事だ！」

驚く東郷たちに誠は、

「警視庁広域捜査課の黒田だ。東郷、森川、白石、お前たちの企みもここまでだぞ！」

と言った。が、その時、

「お前の娘が死んでもいいのかい、刑事さん」

とダーティーが誠に飛びかかり、ナイフで肩口を切りつけた。誠は必死になってダーティーの腕を締め上げる。しかし、
「警部！」
ととっさに誠をかばった圭一郎が、腹にキックを浴びて倒れこんだ。
「人でなし！こんな悪党の言いなりならないで。お父さん！」
手術台にくくりつけられたかおりが絶叫する。
「うるさい！おまえは親父を殺せば用済みだ！」
ダーティーはそう言うと、かおりの身体に高圧電流を流した。
「ギャャャーッ！」
かおりは悲鳴を上げぐったりしてしまった。
「お前の娘の身体で、いろんな実験をさせてもらったぜ。ゼトラマックスを超える薬の研究のためにな。フフフフ…」
東郷が不気味な笑い声を上げた。
「ふざけたまねしやがって！」
圭一郎が怒鳴る。
「まもなくお嬢さんは口が利けなくなるはず。ゼトラマックスと併用した薬の効果でね」
白石が言う。
「そうなれば、我々の計画が世間に知られることは一〇〇％ない。お前の仲間たちにも薬が効いてくる頃だからな」
森川も続く。
「ちくしょう！」
「こんな悪党の言いなりになるな。お前は刑事の誇りを貫け！」
悔しがる誠に向かって、竜治と一郎が後ろ手に縛られた姿で叫ぶ。
「俺たち警察をバカにするな！お前らは全員逮捕だ！」
誠は怒りに任せ、殺し屋たちを撃った。が、
「向こう側を見ろ！あの医者がどうなってもいいのか！」
とダーティーがいった。
「なにっ！」

圭一郎が振り向くと、すぐ後ろで殺し屋の一人が南原を締め上げて銃をちらつかせ、ドアにロックをかけていた。そして、
「今度の事件で我々の検挙に失敗すれば、警察は市民から信用を失う事になっていくはず。ハハハハハッ」
と森川が高笑いをした。そしてダーティーが、
「お前たちも死んでもらう」
と部下の殺し屋と共に、誠と圭一郎に殴りかかった。
思うように動きがとれず、足を撃たれた誠は、
「うわっ」
と膝をついて倒れこんだ。それをかばった圭一郎も、殺し屋に投げ飛ばされ、気を失ってしまった。
「これでもう真相は闇の中も同然。後はダークパンサーだけだ」
東郷がほくそ笑み、森川、白石と高笑いした。
が、その瞬間、
「ガッシャャャーン」
という音がしたかと思うと、中央手術室のドアが、
「ドォォォォン」
という大音響とともに木っ端微塵になった。その衝撃で殺し屋たちが壁や床、棚に叩きつけられ、東郷たちも床に叩きつけられた。
「な…何事だ！」
東郷が怒鳴ると、
「人の命を守る研究と見せかけて、その研究で作った薬で人殺しをしておいて、さらにそれが明るみに出るのを恐れて警察、マスコミに圧力をかけて、殺し屋たちを使ってスキャンダルをもみ消そうとした悪党め！あんたたちを待っているのは血の制裁よ！」
「森川光三郎、お前が白石健一郎と組んで、厚生労働省と中央薬事審議会に圧力をかけていたのは、調べがついてるぞ！」
と声がした。
「おまえら一体何者だ！」
ダーティーが怒鳴る。

と、次の瞬間、黒のブーメランと紫のバラをモチーフにしたかんざしのようなものが宙を舞い、殺し屋二人の左腕に突き刺さった。
そして、
「悪党め！いい加減に観念しなさい！」
「貴様らの企みもこれまでだぞ」
と声の主である小夜子と、ダークパンサーが現れた。
「やっちまえ！」
東郷が怒鳴り、殺し屋たちが二人を取り囲んだ。ダークパンサーは挑みかかった殺し屋を投げ飛ばすやいなや、
「俺の姿は怒りの化身！人に隠れて闇を切る！」
と言い放ってワルサースナイパーを抜き、剣に変化させると、殺し屋たちを次々に切りつけていった。
「ぎゃっ」
「げっ」
「ぐああっ」
殺し屋たちが切りつけられ次々と倒れていく。
小夜子はその間に誠と圭一郎に、
「しっかりして！」
と言って二人を起こした後、近くにいた竜治と一郎を縛っていたのロープをレーザーナイフで切った。そして手術台からかおりを助け出すと、
「皆、早く逃げて！」
と叫んだ。
「わかった！」
一郎が竜治と一緒にかおり、誠、圭一郎をかばいながら、南原と走る。
小夜子は、
「バイオレットベレッタ・アタックモード！」
と光線銃・バイオレットベレッタを抜くと、殺し屋の右腕に光弾をヒットさせた。

「ぐあっ！」
男がうめき声をあげてばったり倒れこんだ。
ダークパンサーは軽くジャンプすると、森川の腹にキックを命中させた。そして、
「天罰！」
と叫ぶと、イーグルスライダーでスーツの上着を切りつけた。
「な、なぜだ！なぜ我々がここにいるのがわかったんだ、お前ら」
東郷が震える声になった。その時、
「その答えは俺が教えてやるぜ、悪党ども！」
と竜治が現れた。
「なにっ！」
白石とダーティーが怒鳴る。すると、
「俺たちが貴様らに捕まる前からつけていたネクタイピン、それがダークパンサーに今の位置を知らせる発信機になっていたのさ」
と竜治が答えた。そしてダークパンサーも、
「ついでにもう一つ教えてやろう。そのネクタイピンには、超高性能の盗聴器もセットしてあったのさ。つまり貴様らが南原さんを襲ってからの一部始終は、俺と警察に筒抜けだったんだ。それからお前たちの捕まえた南原さんをよーく見ろ！」
と言った。
「なにっ！」
東郷が怒鳴ると、白衣を脱ぎ捨て、
「お前たちがかおりちゃんの事に気を取られている隙に、南原と相談して入れ替わって色々と調べさせてもらった。臓器売買の証拠も手に入れさせてもらったぞ！」
と一郎が人工皮膚をはがし、正体を見せた。
「なにっ！」
東郷がぶ然とした表情を見せる。
「一郎、やるじゃないか！」
竜治はびっくりした表情を見せたが、

「なあに、俺も誠たちの証拠探しに協力したかったからさ。ジャーナリストが危険恐れてどうするんだよ！」
と一郎は言った。
「さすがの殺し屋たちもネクタイピンとお芝居にはだまされたようね。観念しなさい！」
小夜子が言った。
「おのれ…四人とも生かして返すな！」
ダーティーが悔しそうに怒鳴り、残った殺し屋たちが三人を取り囲んだ。
「そうなの、自分たちの罪に対して悪あがきしたいのならば、やむを得ないわね」
小夜子は冷ややかに言った。
「お前らの様な奴の為に人知れず社会の悪に泣く人を、俺たちはほっておけないんだ！」
竜治が言った。
「その為に私は野獣になった。悪党たちを懲らしめる野獣にね」
小夜子はそう言うと、
「社会の巨悪に宣戦布告！」
と続けた。そしてダークパンサーが、
「闇にうごめく悪を斬る！」
とドスをきかせた。
「やれ！」
東郷の声と共に殺し屋たちが四人に向かってきた。
「一郎、ここは俺たちに任せて安全な所へ逃げろ！」
「わかった」
殺し屋を投げ飛ばしたダークパンサーの言葉にうなずき、一郎はすぐさま外へと駆け出して行った。
「暗闇にうごめく悪に死のバラを…我は紫紺の悪を追う影！」
小夜子はゆっくりと静かに言いながら、殺し屋たちをバイオレットベレッタで倒していった。そして、

「成敗！」
と叫んでジャンプし、東郷に回し蹴りをお見舞いした。さらに東郷が倒れこんだところで竜治がすかさず巴投げを炸裂させた。東郷の身体が宙を舞い、その身体が壁に当たってバウンドする。そこへダークパンサーがとどめのストレートキックを決めた。
「うおっ」
東郷がうめき声をあげると、
「覚悟！」
と小夜子はかんざし状の武器・ローズクロードを投げつけた。
「ぎゃっ」
太ももに刃が突き刺さり東郷は悲鳴をあげる。
その間に竜治は、倒された殺し屋たちのマシンガンを手にし、ドドドドッと一気に殺し屋たちを打ち倒していった。だがその時、白石が隙を見てダークパンサーに発砲し、逃げ出そうと走り出した。しかし、
「白石、俺にはそれは通じないぞ。イーグルスライダー！」
とダークパンサーのイーグルスライダーが宙を舞い、その刃が白石の右腕を直撃した。
「うああっ！」
絶叫と共に倒れる白石を見つめるダークパンサーと竜治。がその時、その背後からダーティーがロケットランチャーを発射しようとしていた。
「危ない！」
とっさに叫んだ小夜子は間一髪ジャンプして攻撃をかわし、ダーティーの背後に回りこんだ。ダークパンサーも竜治をかばってその場に身を伏せた。
「なにっ！」
すぐ後ろに現れた小夜子の姿にダーティーは一瞬ひるんだ。そして手にしていたロケットランチャーを落としてしまった。
「たあっ！」

小夜子は大きくジャンプしてダーティーの胸元にキックを決めた。
そして、
「黒い闇…希望に変えるバラのとげ…。ローズクロード＝シャドーファイナル！」
と叫んでローズクロードをダーティーの両肩に投げつけた。
「ぐああっ！」
がっくりと膝をつきダーティーは断末魔のごとき絶叫と共に倒れこんだ。
その様子を逃げ回りながら見ていた森川は、
「お前ら一体何をしているんだ」
と半狂乱状態になっていた。
「お、お前ら、私を殺す気か！」
森川がおどおどした口調になる。
「殺しはしないわ。その前にこれをどうぞ」
小夜子はドスをきかせて言いながら、ピンクのバラの花をかたどったタブレットを森川の口の中に放り込んだ。そして森川に、
「あなたにバラの精の祝福がありますように！」
と水を渡し、ダークパンサー、竜治と共に森川のいる部屋から姿を消した。
「野郎ッ！」
三人を追って残った殺し屋たちが三人に向かってきた。しかしその時、
「それっ！蜘蛛の巣にでもくっついちゃってなさい！・シルキースパイダー」
と小夜子が手甲の部分から白いネットを殺し屋たちの方向へ投げ込んだ。
「なにっ！」
殺し屋の一人がひるんだ次の瞬間、そのネットは襲いかかって来た殺し屋たちをまとめて縛り上げ、壁に貼り付けられた状態にしてしまった。

「おのれっ…う、うわあっ！」
殺し屋の一人がネットの糸を解こうとしたが、糸は中々解けない。それどころかシルキースパイダーには電気ショックの仕掛けが組み込まれていた。
「大きな蜘蛛の巣に引っかかるのと、警察に捕まるのとどっちがいいかしら。バイバイ！」
小夜子はいたずらっぽく言って、ダークパンサー、竜治と共に姿を消した。

その頃、小夜子に言われるままにタブレットを飲み込んだ森川は、やがて秘書の一人に電話をかけようと携帯電話を取り出した。
「あ、もしもし、私だがすぐに迎えに来てくれないか。場所は東光大学病院だ。これから玄関に向かう。後でゼトラマックスの…」
森川がここまで言いかけたその時だった。
「ううっ、からだがしびれる…ぐあああっ！」
森川の身体を強烈なしびれが襲ってきた。森川は携帯電話を落としてしまい、その場に立っていることが出来なくなってしまったのだ。
「あの小娘野郎…」
苦しそうに森川が何とか立ち上がろうとしたその時、
「お前の悪事はいずれ明るみになる」
「お前たちの陰謀のために死んでいった人たちの代わりに」
「森川光三郎、地獄に送ってやるわ！」
とダークパンサー・竜治・小夜子が現れた。
「お、お前ら…まさか」
森川が驚きの表情を見せたその時、
「えいっ！」
竜治が森川のあごにかかと落としを決めた。
「成敗！」
ダークパンサーが連続パンチを浴びせた。そして、

「たあっ！」
と小夜子が森川の身体を鮮やかに投げ飛ばした。
「ぐあああっ」
森川は小夜子の投げ技が効き過ぎたせいか、気絶してしまった。
「よし、行こう！俺たちの正体がばれるとまずいからな」
竜治が言った。
「でも森川にはばれないかしら」
小夜子が不安そうに言った。
「大丈夫、君に渡したバラの花のタブレットは、しびれ薬と一時的に脳の記憶中枢を麻痺させる薬を混ぜて作ってあるものだから、そんな心配はいらないさ」
ダークパンサーは言った。

小夜子、ダークパンサー、竜治は病院の裏口に出た。そして小夜子とダークパンサー＝哲夫は、シャドーテクターの装着を解除し、元の姿に戻った。その時、
「ううっ」
と小夜子が疲れのために倒れこんだ。
哲夫が小夜子の体を受け止め、
「小夜ちゃん、大丈夫か」
と声をかける。
「黒木さん、竜治さん、かおりは…無事なの？…皆は？　」
小夜子は息を切らしながら哲夫と竜治に聞いた。
「大丈夫さ、けがをしたのはお父さんとお父さんの仲間だけだし、かおりちゃんも歩くぐらいは平気だよ。一郎も南原さんも大丈夫。もちろんこの俺も。お父さんたちもひどいけがではないさ」
竜治が言った。
「よかった…」
小夜子はほっとしたようにつぶやいた。
「黒木、また戦いが始まるな」

竜治が哲夫に言う。
「ああ、でもやるしかないぜ俺たちが。森川たちの様に、金と権力にものを言わせて影で悪事を働いている人間の為に犠牲になるのは、いつも弱い立場の人間だからな」
「そんな悪事を働く奴らに、この社会を託しちゃいけないぜ」
「そうだな。俺たちはその為に…皆の笑顔の為に戦ったんだから。本当はこの力はもう使いたくなかった。でもやるしかない。昔以上に大変な戦いになるかもしれないが」
哲夫が苦悩の表情を浮かべてつぶやいた。
その時小夜子が、
「黒木さん、竜治さん、私も一緒に戦うわ」
と言った。
「森川たちみたいに金と権力にものを言わせて悪事をやっているずるい大人たちのいる一方で、戦争で親を失ったり大けがをしたりして障害を持った子供たちがいる。病気の治療法がわからずに長生きできない子供もいるのよ。こんな不公平絶対おかしい！」
「君の言うとおりだよ」
竜治がうなずく。
「私は絶対に許せない！金と権力にものを言わせて悪事を働いてのうのうとしている大人たちが！それにそういう大人に限って、殺し屋を使って真相を暴こうとする者を殺している。そういう奴らと戦うことが危険なことはわかっているわ。でも、そういう事をしてまで権力にしがみつく大人たちがいる中で、黒木さんみたいに命がけでその悪と戦っている人がいるのを知って、私真剣に思ったの。力になりたいって…。だから私は仕置人になろうと決意したの」
「そうだったのか…君らしいな。俺が君にシャドーアクセプターを渡したのは、君の純粋さに俺の心が動いたからかもしれない。だが、これからは命がけだぞ」
「わかったわ」
「でも、俺はいざとなったら、君の事は自分の命に代えても守って

見せる。俺は独り身だけど君の事は小さい頃から知っているからな。まあ俺は兄貴代わりしか出来ないけどな」
「黒木さん、私…」
小夜子が言いかけた。
「どうしたんだ、小夜ちゃん」
哲夫が聞き返す。
「私…黒木さんほど心の優しい行動力のある人が、たった一人でどうしてこんな危険な戦いをしなくちゃいけないのかと思っていたの。本当は…。黒木さんが活躍できる場所、他にもありそうなのに。黒木さんの身体の傷を見たら辛くなりそう」
小夜子はそう言って泣き出した。そして泣きながら、
「でも私、黒木さんが信念を持って悪と戦ってきたのがわかるから、戦いの中で命を散らしてほしくない。私のお母さんが昔、黒木さんと一緒にテロ組織に立ち向かっていたのは、お父さんからもよく話は聞いていた。だから今度は私が、私のお母さんの代わりに黒木さんの力になりたいの！お父さんと同じ位、黒木さんは尊敬できる人だもん」
「君は本当に勇気があるな。若い頃の君のお母さんに本当にそっくりだ」
哲夫はかつて一緒にテロと戦った美咲の勇姿を、小夜子に重ね合わせていた。
「皆が笑顔で生きられる世界を作りたい…。お母さんはよく言っていたわ。その為にお母さんは地雷から子供たちを救おうとして志半ばで死んでいった。だからお母さんの思いを継ぎたいの！一人一人の命が同じように大事にされる社会になってほしいから」
「その通り、いろいろなところに悪は形を変えて存在しているけど、その為に人知れず泣いている人たちがいる事を忘れちゃいけないんだ。俺たちが戦うべき敵は社会の中で見えにくい悪。その見えない悪からみんなの笑顔を守るために、俺は戦い続けてきたんだ。これ以上見えない悪の為に涙を流す人がいなくなればと、俺はいつも思

っている」
「その気持ち、俺も一緒さ。黒木」
「森川のような悪党にこの社会を託したらとんでもない事になるもの。でも、そんなことは絶対にさせない！」
小夜子は涙を拭いてきっぱりと言った。
「俺たち3人、何とか頑張ろうぜ」
「うん」
哲夫の言葉にうなずく小夜子と竜治。三人を月が優しく照らしていた。

それから二週間後、東京に戻ったためぐみの告発と哲夫たちの取材、南原とかおりの証言が決め手になり、森川光三郎と白石健一郎、そして東郷裕一とその部下が同時に逮捕された。だが警察は、彼らを痛めつけたダークパンサーと謎の女戦士の正体を突き止めることは出来なかった。そしてマスコミも二人の活躍を話題にしていたものの、正体を突き止めるまでには至らなかった。

「小夜ちゃん」
哲夫が小夜子に呼びかけた。
「後悔してないか」
「正直言うとまだ戸惑っているわ。それにいつ普通の生活に戻れるかわからないでしょ？ちょっぴり後悔している…かな？」
小夜子は素直な気持ちを打ち明けた。
「正直でいいな」
哲夫はそう言って優しく微笑んだ。
「でも、もういいの。せっかく悪と戦う力を手に入れたのなら、私、その力を絶対皆のために役立てて見せるわ」
小夜子はきっぱり言った。
「よし、約束だぞ。パープルシャドー」
「えっ！？」

哲夫の言葉に小夜子は一瞬戸惑った。
「どうやらダークパンサーは現代の黒騎士と言われているみたいだが、小夜ちゃんの変身したあの姿は、紫頭巾やくの一みたいだって噂になっているらしいからね。それで浮かんだのさ」
哲夫はそう言っていたずらっぽく笑った。
「あらら、そんなに大騒ぎになっちゃったの？でもまあいいか！」
照れくさそうに小夜子が微笑む。
「これからも頼むぜ、小夜ちゃん」
哲夫はそう言うと小夜子の肩をポンと優しくたたいた。その上には澄んだ色の青い空がどこまでもさわやかに広がっていた。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1843i/

ダークチェイサー・ゼトラマックスの秘密

2010年10月8日15時56分発行